

仏国初期商法上の会計帳簿記録の本質

——サヴァリー法典に於ける会計帳簿の存在意義解明の手掛りとして——

山 添 昌 彦

目 次

- 一 問題の所在
- 二 商事王令上の会計帳簿の種類
- 三 商事王令上の会計帳簿の記録対象
- 四 仏国初期商法上の会計帳簿記録の本質——問題の提起——

一 問題の所在

会計学上の基本的文献によれば、法令の規定する会計すなわち法的な会計の出現は、仏国の初期商法たる「商事王令 (Ordonnance sur le Commerce——屢々商業条例と意識される)⁽²⁾」の規定する会計を以て嚆矢とするが、かかる商事王令の規定する会計と、現在の我国商法の規定する会計いわゆる我国商法会計とは、我国商法の歴史を看る限りに於いて、全く不可分な関連を有していると言わねばならない。なんとすれば、我々は、商法に於ける会計規定の祖型を求めて、我国商法の歴史を次の如く遡り得るからである。

我国最初の商法たる一八九〇年公布の所謂旧商法は「ドイツ人ヘルマン・ロessler (Herman Roesler) の草案に基づくものであり、その編別はフランス法的であったが、規定の実質的内容はドイツ法的なものであった」といわれ、この旧商法に代わる一八九九年公布の現行商法は「編別・内容ともにドイツ旧商法に依っている」といわれている。⁽⁴⁾つまり、我国の現行商法は、ドイツ旧商法すなわち普通ドイツ商法典 (das Allgemeine Deutsche Handelsgesetzbuch) に倣い制定されたということである。とすれば、我国商法はその歴史を普通ドイツ商法典へと遡り得ることとなるが、この普通ドイツ商法典は一八六一年にフランス商法典 (Code de Commerce) を模範として制定されたといわれている。⁽⁵⁾さらに、このフランス商法典に就いてもまた、「近代商法典の名に値する最初の法典」⁽⁶⁾として、その規定内容をルイ十四世の二大法典たる一六七三年の商事王令および一六八一年の海事王令 (Ordonnance de la marine) に負うて、一八〇七年に制定されたといわれている。⁽⁷⁾要するに、我国商法の拠り所となる普通ドイツ商法典はフランス商法典を、またこのフランス商法典はルイ十四世の二大法典を模範としているということである。

こと右の如くならば、我々は我国現行商法の歴史を、普通ドイツ商法典、フランス商法典を経てルイ十四世の二大法典にまで遡り得ることとなる。そして、かかるルイ十四世の二大法典については「フランス国家の手による統一的包括的商事立法の端初として特記すべきもの」⁽⁸⁾、「商事に関する最初の国家的立法として一般商法史上に於ける画時代的業績」⁽⁹⁾、「近代商法典の濫觴として、商法史上忘るべからざる不滅の地位を占めるもの」⁽¹⁰⁾なる指摘の為されているところからも明らかな如く、この両法典は「世界最初の商法典」⁽¹¹⁾、「最初の統一的国家商法典」⁽¹²⁾なる評価を得、この両法典こそが現在に於ける商法の歴史的淵源をなすと考えられているのである。従って我々もまた、我国商法の歴史を遡ることを、ここに断念しなければならぬこととなる。すなわち、かかる両法典を以て我国商法の歴史的淵源と看做さねばならぬこととなるのである。

斯くの如くに我々は、我国商法の会計規定の祖型を求めて、商法の歴史を概観することにより、ルイ十四世の二大法典にまで行き着くことを得る。しかしながら、かかる両法典のうち海事王令については「その規定内容とするところは広汎にして、海上貿易に関する契約、例へば保険、傭船契約、冒險貸借等の外に、海事裁判管轄や裁判手続、海外在住の領事の特権を規定し、又海員の義務、レヴァント海諸港に関する規定や、水先案内人、其他海難救助や漁業に関する規定をも含むものであった。今その編別を見ると、第一編は、海事裁判所職員及び其の裁判管轄権を規定し、第二編は船員及び船舶を、第三編・海事契約、第四編・港灣海岸警察、第五編・海上漁撈となっていた。」⁽¹³⁾という指摘が為されている。また、商事王令については「從來存在したる種々雑多の慣習を整理して商人がその為に払わざるを得なかつた無用の考慮を縮少せしめ、又商事件に於ける立法の統一並びに訴訟費用の軽減、訴訟期間の短縮を計ることによって商人活動の円滑を計り、或は商業帳簿を調製して日々の取引を記入せしめ、手形その他の商行為を規律するなどによって、商人生活の安全を図り以て大局的に商人を国家的保護の下におかんとするものであった。」⁽¹⁴⁾と指摘されている。この両指摘に明らかな如く、我国商法の会計規定の祖型は、海事王令と商事王令の両者のうち、商業帳簿に関する規定を有すると言われる商事王令に於ける会計規定に求め得ることとなる。

右に於いて我々は、我国商法の歴史を、普通ドイツ商法典からフランス商法典へと遡り、最終的にはその淵源をルイ十四世の二大法典に求め得ることを以て、我国商法に於ける会計規定の祖型をルイ十四世の二大法典、就中商事王令に於ける会計規定に求めることを得た。とすれば、この商事王令に於ける会計規定がフランス商法典から普通ドイツ商法典を経て、我国商法に受継がれていると考え得ることとなる。とするならば更に、我国商法の規定する会計であるところの、我国商法会計の歴史的淵源は、この商事王令に於ける会計規定による会計即ち商事王令上の会計に求め得ることとなる。このことは正に、岩田教授を以て「わが商法は、いわばフランコ・チャーマン系統の流れを汲む

ものであつて、仏国のオルドナンス・ド・コムメルス（商事王令）に端を発した古典的計理体系を旧独乙商法を通じて継承しているのである。⁽¹⁵⁾と言わしめた所以である。つまり、商事王令上の会計は、フランス、ドイツ各国の商法典を経て、我国の商法会計に少なからぬ影響を及ぼしていると考え得るのである。ここに我国商法会計の本質解明のための一つの重要な手掛りを見出す。即ちそれは商事王令の会計の本質を詳らかにすることである。商事王令上の会計すなわち仏国初期商法会計には、我国商法会計の本質が必らずや顕現している筈である。

かくて、我国商法会計の本質解明のための一手掛りとして我々は、商事王令上の会計の本質解明を試みるべきことになる。このためには商事王令に於ける会計規定が一体如何なるものであるのか、即ちその規定内容の検討がまず必要となる。そこでかかる観点に立ち商事王令の内容を概観するならば、それは立法の理由を述べた前文と十二章一二二箇条に及ぶ成文規定とから成ることが判る。即ち、その各章標題および夫々の章に含まれている条文数は次の通りである。

第一章 卸売並びに小売を行う徒弟、商人及び普通商人に就いて (Des Apprentifs, Negocians, & Marchands, tant en gros qu'en detail.)、十一箇条。⁽¹⁶⁾

第二章 銀行代理人及び仲立人に就いて (Des Agens de Banque, & Courtiers.)、三箇条。⁽¹⁷⁾

第三章 商人、普通商人及び銀行業者の諸帳簿及び諸記録簿に就いて (Des Livres & Registres des Negocians, Marchands, & Banquiers.)、十箇条。⁽¹⁸⁾

第四章 会社について (Des Societez)、十四箇条。⁽¹⁹⁾

第五章 為替手形及び為替証書並びにその振出に関わる約束に就いて (Des Lettres & Billets de Change, & promesses d'en fournir.)、三十三箇条。⁽²⁰⁾

第六章 為替及び戻為替の利息に就いて (Des interets du Change & Rechange.)、九箇条。⁽²¹⁾

第七章 身体拘束に就いて (Des Contraintes par corps.)⁽²²⁾ 一箇条。

第八章 財産の分割に就いて (Des Separations de biens.)⁽²³⁾ 一箇条。

第九章 抗弁権及び支払猶予状に就いて (Des Defenses & Lettres de Repy.)⁽²⁴⁾ 五箇条。

第十章 財産の譲渡に就いて (Des Cessions de biens.)⁽²⁵⁾ 一箇条。

第十一章 破産及び詐欺破産に就いて (Des Faillites & Banqueroutes.)⁽²⁶⁾ 十三箇条。

第十二章 商事裁判権に就いて (De la Jurisdiction des Consuls.)⁽²⁷⁾ 十八箇条。

これら各章標題より、第三章が所謂商業帳簿規定として我々の注目に値する。のみならず、その他の各章各条文の規定内容を一瞥することにより、第三章以外にも第一章、第九章、および第十一章に於いて部分的にはあるが、会計に係る諸規定の散見することを知る。

そこで今、かかる会計諸規定の内容を概観すれば、次のことがわかる。即ち、第一章第四条は、職工親方を志す徒弟に対して「複式簿記・単式簿記による帳簿」についての知識を要求している。また第三章は、帳簿の備え付け及び記載内容(第一条、第二条、第六条)、帳簿に必要な公証手続(第三条、第四条、第六条)、帳簿の記載様式(第五条)、商業書簡の取扱い(第七条)、財産目録の作成(第八条)および帳簿・財産目録の提示・提出(第九条・第十条)を規定している。さらに第九章第一条は、商人の支払不能時に於ける、書記局への財産目録の届出、債権者への帳簿の提出を規定し、第十一章第二条および第三条は、破産に係る財産目録・帳簿の提出を、同章第十一条は、帳簿提出についての罰則を定めている。

商事王令に於けるかかる会計諸規定の内容についての詳細なる検討は後段に譲るとしても、右の如きそれらの概観を通じて、今ここに問題となることは、これらの会計諸規定が帳簿あるいは財産目録についての具体的明示を欠いて

おり、そのために各々の規定内容の関連が必ずしも明確であるとは言い得ないということである。この問題は、我国の昭和二十四年当時の商法に於ける会計諸規定に係り、岩田教授を以て指摘せしめた「幅の広い空白」⁽²⁸⁾なる表現を此処に用いて次の如く言い換えることができる。即ち、商事王令に於ける会計諸規定は非常に断片的であり、夫々の規定内容の間には「幅の広い空白」が存し、故に商事王令の予定する会計の全体像は明文を以て示されてはいないのである、と。従って、商事王令上の会計の本質に迫るために当王令上の諸規定のみを以てしては、手掛りとして如何にしても不充分であると言わざるを得ないのである。商事王令の会計諸規定に於ける空白部分を補い、当王令上の会計の本質解明に充分に役立つ手掛りを一体どこに求めるべきであらうか。

右の問題については、岩田教授の次なる指摘がその解答を示唆する。岩田教授は我国商法の会計諸規定について「これら諸規定は、ある特定の見地から、とくに取締の必要ありと認められた若干の重要点についてのみ、断片的に設けられたものである。したがって規定と規定の間には、幅の広い空白が横たわっていて、商法の観念する会計制度の全貌は明文を以て示されてはいない。従来、この規定の空白部分は、会計の実務慣習や会計学の原理手続にこれを埋めることが委されていたのであった。」⁽²⁹⁾と指摘する。かかる指摘に拠れば、商事王令の会計諸規定に於ける空白部分は、当時の会計の実務慣習により充填し得ると考え得ることとなる。このような観点は、ドイツ商法および株式法に於ける所謂「正規の簿記の諸原則」についての田中教授の指摘のうちにも参観し得る。即ち「『正規の簿記の諸原則』なるものが果して何を意味するやは甚だ明瞭を欠くのであるが、要するに立法者は企業間に於いて一般的に慣行せられている実務上の原則なるものが存在して居り、法は個々の重要点に関し自ら規定を設ける場合を除いて単に白紙的规定を設け、細目を実務上の慣行に委任しているものと認めなければならぬ。此の場合に於いては委任を受けた実務の内容は法的性質を有することになるのである。」⁽³⁰⁾

右の如き、商事王令会計規定に於ける空白部分の充填を当時の会計実務に委ねるといふ観点からは、フィルモン・ルイ・サヴァリー (Philemon Louis Savary) の次なる記述が重要となる。即ち「サヴァリー (Savary) 氏は商業界から身を引いたとはいえ、そこに於いて得た名声は、彼が常に招かれたところの多くの重大事の調停により益々高まり、一六七〇年には、民衆により望まれていた商人法典の編纂——この法典は三年後に世に出ることとなる——のために彼は、商事に関するその知識と経験とを役立てるべく招かれた。」⁽³¹⁾そして「そこに於いて彼は堅実な意見と、或る条項を緩和するべく度々申し出される危険な意見に対する毅然とした対応とによって、非常な頭角を現わし、その結果そのほとんど大部分は彼の意見に基づき調製されることとなった。委員会議長であったプッソール (Pussot) 氏は通常、この王令を『サヴァリー法典』⁽³²⁾としか呼ばなかった。この委員会が閉会したのは、彼の『完全なる商人 (Partait Negociant)』のいわば誕生の時であり、彼はその初版を二年後に世に出した。」⁽³²⁾更に「『完全なる商人』の権威は絶えず増大し、遂には商事のための規則として役立つほどとなった。その著者サヴァリーは、自らの述べたことが弁護士席に於いて引用される榮譽を受け、彼の決定はほとんど法律と同等に扱われた。」⁽³³⁾

かくの如く、サヴァリーが当時の商業実務に精通し、しかも彼が商事王令の制定に係り中心的役割を担っていたことから、彼の著書である所謂「完全なる商人」⁽³⁴⁾は、当時の会計の実務慣習を豊富に扱い、のみならず当王令についても詳細なる注釈を施していると考え得ることを得る。とすれば、当王令の会計諸規定に係る空白部分は、この所謂「完全なる商人」によって補われ得る筈である。さらに、この「完全なる商人」は、我々の研究対象たる商事王令に於ける会計規定の空白部分を補うものであると考え得るのみならず、それは、商事王令の予定する会計が如何なるものであるのかの解明にとっては、不可欠のものであると言わねばならない。かくて、商事王令に於ける会計規定の空白部分を埋め、商事王令上の会計の本質を詳らかにするためには、サヴァリー著の所謂「完全なる商人」に依拠すること

が是非とも必要となる。

斯くして、商事王令上の会計の本質を検討するにあたり、サヴァリーの著した「完全なる商人」を拠り所とすべきこととなるが、かかる検討は、言うまでもなく、商事王令上の会計規定の内容の觀察をその出発点とする。この会計規定の内容は、前述のその概観を以て既に明らかな如く、商事王令上の会計に係り、帳簿及び財産目録の存在を示唆している。曾て我々は、この商事王令第三章第八条に規定されている財産目録に就いて、それが「商事王令上の決算財産目録」と称するに値する内容を有し、その内容である商事王令上の決算の特質を「分配可能利益の計算」と「債務弁済能力の計算」との両計算なることを明らかにした。⁽³⁵⁾ その際、かかる財産目録の作成手続の検討から、当該目録が日記帳等の所謂会計帳簿⁽³⁶⁾の記録とは全く無関係に作成されていることも明らかとした。つまり、商事王令第三章第八条を以て規定されている財産目録は、實際調査に基づき作成されており、会計帳簿上の記録からの所謂誘導を以て作成されているのでは決していないのである。従って、当該目録上の計算である商事王令上の決算は、会計帳簿からは全く独立した計算であると特徴づけ得たのである。とするならば、商事王令上の会計に於いて、会計帳簿記録は如何なる意味を持つているのかが問題となる。即ちこれは、商事王令に於ける会計帳簿の存在意義に関わる問題である。かかる問題解明の手掛りは、会計帳簿の記録の解明に求め得る筈である。即ち、会計帳簿に記録されているものが何であるかを解明することにより、それを手掛りとして、その様なものを記録する会計帳簿とは何であるのかを解明し得ることとなるのである。要するに、商事王令上の会計帳簿の本質即ちその存在意義に迫るために、延いては商事王令上の会計の本質に迫るために、我々が取組むべきは、商事王令上の会計帳簿記録の本質を解明することである。商事王令上の会計に於いて、決算とは何等係らぬ、会計帳簿記録とは一体何であるのか。

注

- (1) 黒澤清著、三訂増補会計学、千倉書房 一九三九年、一五二頁、太田哲三他著、改訂会計学、千倉書房 一九八三年、一六一頁、飯野利夫著、財務会計論(改訂版)、同文館 一九八三年、一二〇頁、等々枚挙にいとまなし。
- (2) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands.
 原語の通りに忠実に邦訳するならば「商人及び普通商人の商事に関するフランス及びナヴァルの国王ルイ十四世の命令」であり、これを略称して「商事に関する王の命令(Ordonnances de Roy sur le Commerce)」即ち「商事王令」とした。なお、従来我国に於いては、この法令を指す略称として「商業条例」がしばしば用いられているが、それ以外にも「商事勅令」、「商事条例」、「商事法令」等を散見し得る。また、これら略称の適否に就いては、次の文献に詳しい検討を参看し得る。即ち、岸悦三著、会計生成史——フランス商事王令会計規定研究——、同文館 一九八〇年、一九九・二〇〇頁。
- (3) 大隅健一郎著、商法総則(新版)、有斐閣 一九七八年、一八頁。鴻常夫著、商法総則、弘文堂 一九七九年、四二頁。
- (4) 服部栄三著、商法総則、青林書院新社 一九七二年、一〇六頁。
- (5) 戸田修三他編、改訂商法(総則・商行為)講義、青林書院新社 一九七九年、二五頁。
- (6) 戸田修三他編、改訂商法(総則・商行為)講義(前掲)、一四頁。
- (7) 服部栄三著、商法総則(前掲)、九二頁。
- (8) 西原寛一著、近代的商法の成立と発展、日本評論社 一九五三年、二九・三〇頁。
- (9) 田中耕太郎著、改正商法総則概論、有斐閣 一九三八年、一四四頁。
- (10) 佐藤義雄、ルイ十四世の商事勅令(同志社論叢、第五〇号 一九三五年、一一四二頁所収)、四・五頁。
- (11)(12) 戸田修三他編、改訂商法(総則・商行為)講義(前掲)、一四頁。
- (13) 佐藤義雄、ルイ十四世の商事勅令(前掲誌所収)、一八頁。
- (14) 佐藤義雄、ルイ十四世の商事勅令(前掲誌所収)、一三頁。
- (15) 岩田巖、商法における計理體系(會計、復刊第一号 一九四八年、二六—四七頁所収)、二六頁(挿入—山添)。
- (16) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands, Paris 一六七三年、三一八頁。
- (17) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲)、八一—九頁。

- (18) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 九一—一二頁。
- (19) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一二三—一三八頁。
- (20) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一八—一九頁。
- (21) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一二九—一三二頁。
- (22) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一三二—一三三頁。
- (23) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一三四—一三五頁。
- (24) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一三五—一三七頁。
- (25) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一三八—一三九頁。
- (26) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一三九—一四三頁。
- (27) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一四四—一五一頁。
- (28)(29) 岩田巖著、利潤計算原理、同文館 一九八〇年、一二五頁。
- (30) 田中耕太郎著、貸借対照表法の論理、有斐閣 一九四四年、三六頁。
- (31)(32)(33) Savary, J. (Philemon Louis Savary), Le Parfait Negociant ou Instruction general pour ce qui regarde le Commerce des Marchandises de France, & des Pais Etrangers, Paris 一七二二年 第八版(以下に於つては凡そ「Le Parfait Negociant

第八版」と略称する)、序文。

(34) Savary, J., *Le Parfait Negociant ou Instruction general pour ce qui regarde le Commerce de tout sort de Marchandises, tant de France, que des Pays Estrangers*, Paris 一六七五年 初版(以下に於いてはこれを「Le Parfait Negociant 初版」と略称する)。

(35) 山添、仏国初期商法決算の二元的構造——サヴァリー法典会計規定の研究——(神奈川大学大学院経済学研究科編、研究論集、第九号 一九八五年、四五—一二八頁所収)。

(36) 我国の現行商法の総則第三十二条は、会計帳簿と貸借対照表の両者をあわせて「商業帳簿」なる表現を為す。また、我国の昭和四十九年改正前商法は、日記帳・財産目録・貸借対照表の三種を「商業帳簿」なる一語を以て表わしていた。つまり、我国商法に依れば、商業帳簿と会計帳簿とはそれらの用語の意味する内容が異なるのである。かかる用語法は、商事王令の第三章の規定に於いても存在している。即ち、同王令の第三章の規定内容に依れば、「帳簿」という語は、日記帳等の所謂会計帳簿と財産目録との両方を表現している。そこで以下に於いては、かかる商事王令上の「帳簿」から、財産目録を除いた日記帳等のみを示す語として「会計帳簿」を使用する。かくて、以下に於いて「会計帳簿」という語を使用する場合には、そこには財産目録を含まぬこととなる。また、誤解を招かぬ範囲内に於いて単に「帳簿」という場合にも、それはかかる意味に於ける「会計帳簿」を指すこととする。

二 商事王令上の会計帳簿の種類

既述の如く、商事王令上の会計帳簿の存在意義に迫るためには、商事王令上の会計帳簿記録の本質を解明すべく、その検討を為すべきこととなるが、かかる検討にあたっては、商事王令に於ける所謂会計帳簿規定の内容を観察・吟味することがその出発点となる。そこで、前述の如き、当王令上の会計諸規定の内容概観を以て、その会計帳簿規定として最初に我々の目に留まるのは、「商人、普通商人及び銀行業者の諸帳簿及び諸記録簿に就いて」なる標題を持つ、商事王令第三章の規定内容である。かかる章には十箇条にわたる条文が存しているが、我々の問題意識に照らし

て重要と思われるものは次の諸条文の規定内容である。即ち、

第一条 卸売並びに小売を行う商人、普通商人は、其の一切の取引、為替証書、債権及び債務、及び家事費用として使用された金銭を記載する帳簿を備うることを要す。⁽¹⁾

第二条 両替業務及び銀行業務の代理人は、自らにより取引された一切の事項の記載された日記帳を、紛議の際にそれを頼りとすべく、備うることを要す。⁽²⁾

第三条 卸売並びに小売を行う商人及び普通商人の諸帳簿は、商事裁判所の在る市に於いては商事裁判官の一人により、またその他の所に於いては市町村長又は市町村吏員の一人により手数料も税金も無しに、最初及び最後の紙葉に署名を受けることを要す。又、商事裁判官又は市町村長若しくは市町村吏員により委任された人々の手によって紙葉は、最初から最後まで、花押が記され、丁数が付され、それについて最初の紙葉に於いて記載の為されることを要す。⁽³⁾

第四条 両替業務及び銀行業務の代理人の諸帳簿は、商事裁判官の一人により各紙葉に丁数が付され、署名が為され、花押が記されることを要し、又、両替業務又は銀行業務の代理人の氏名について、その帳簿が日記帳として役立つか、現金のために役立つか、及びそれが第一巻であるか、第二巻であるか、それ以外のものであるかという帳簿の特徴について最初の紙葉に於いて記載の為され、それについて商事裁判所又は市役所の書記局の記録簿に於いて記載の為されることを要す。⁽⁴⁾

第五条 諸日記帳は、如何なる空白も無しに、日付の通りに順を追って記入され、各項目に於いて及び末尾に於いて締切られることを要す。また余白には何等記入してはならない。⁽⁵⁾

第六条 すべての商人及び普通商人並びに両替業務及び銀行業務の代理人は、本王令布告後六ヶ月以内に、先

に命じられたことに従い、署名が為され、丁数が付され、花押が記された新しい諸日記帳及び諸記録簿を作成することを要し、もし希望するならば旧帳簿の抄録を記載することを得。⁽⁶⁾

右に掲げた諸条文の規定内容より明らかな如く、⁽⁷⁾ 当王令は、卸売・小売商人全般および両替・銀行業務代理人に対して、帳簿 (un Livre) ・日記帳 (un Livre journal) の備え付けを、しかも王令布告後六ヶ月以内の備え付けを、要請すると同時に「為替証書、債権債務、家事費用」等、「一切の取引」或いは「取引された一切の事項」のそれへの記載を義務づけ、更に、それら諸帳簿に対して署名・花押・丁数等公証手続の必要なることを規定している。しかしながらここに注意を要することは、王令の觀念する会計帳簿には複数あるということの、かかる規定内容から推察し得るということである。即ち、第三章標題に於ける「諸帳簿及び諸記録簿」なる表現はいうまでもなく、その第三条および第四条にいうところの「諸帳簿 (Les Livres)」第六条の「諸日記帳及び諸記録簿 (Livres Journaux & Registres)」なる表現は、当時の実務に於ける複数の会計帳簿の存在を前提としていふと考えねばならない。かかる複数の会計帳簿は、具体的には、第四条に於ける「日記帳として役立つ」帳簿、「現金のために役立つ」帳簿としてそれらの存在を垣間見ることが得る。

また、会計帳簿に於ける取引の記載の仕方について王令は、日付順の秩序立った記帳、項目毎の、また末尾に於ける締切を要請し、更に余白への記入を禁止しているが、それら帳簿が具体的に如何なる記録方法を採るかについては明示していない。かかる帳簿の記録方法については次なる条文の規定内容のうちに僅かに窺い知ることを得る。それは当王令第一章「卸売並びに小売を行う徒弟、商人及び普通商人に就いて」第四条の規定内容である。即ち、

第四条 職工親方を志す徒弟は、自らのかわかることを欲する商業にとり望ましい程度に複式簿記及び単式簿

記による諸帳簿及び諸記録簿について、為替証書及び手形について、算術法則について、オーヌ尺に関する

事柄について、貨幣単位及び重量単位について、商品の寸法及び品質について審問されることを要す。⁽⁸⁾

この規定に於ける「複式簿記及び単式簿記による諸帳簿及び諸記録簿 (les Livres & Registres à partie double & à partie simple)」なる文言より、会計帳簿の記録方法として複式簿記あるいは単式簿記の採用されていたことが推察され得るが、かかる記録方法が「職工親方」のみならず商人全般に対して要求されていたか否か、換言すれば、商事王令が商人の会計帳簿の記録方法として複式簿記あるいは単式簿記を要求していた否かは、この規定の内容とするところからは必ずしも明らかとはならない。

以上に於いて我々は、商事王令上の、会計帳簿に係る条文の規定内容を検討することにより、当王令が会計帳簿を如何に規定しているかを知り得た。しかしながら、そこに於いては、かかる帳簿が複数存在し、その帳簿には商人の爲した一切の取引が、おそく、単式簿記あるいは複式簿記により、日付順に秩序正しく記録されているということ以外、何ら具体的には明らかとはならなかった。これは偏に、商事王令が会計帳簿についての具体的明示を欠いていることに基因している。とすれば、会計帳簿に係る規定内容のこの不明瞭なる点は、前節に於いて既に述べた如く、当時の会計の実務慣習によって補完されねばならぬこととなる。そこで以下に於いては、当時の実務慣習に於ける会計帳簿をサヴァリーの「完全なる商人」のうちに見出し、商事王令の規定する会計帳簿の具体的な姿を明らかにし、そこから商事王令上の会計帳簿記録の本質解明を試みることにする。

サヴァリーは「完全なる商人」第一編第三十三章「大規模な取引を行う小売普通商人が自らの事業運営に於いて遵守すべき秩序およびそれに従い彼らが自らの諸帳簿を付けるべきそのような手法について」⁽⁹⁾および第三十四章「中規模の取引を行う普通商人のための日記帳・仕入帳・売上帳及び理由帳の様式」⁽¹⁰⁾を、商事王令に従い商人が備えるべき会計帳簿の種類・記帳手法の解説およびその記帳の例示に充てている。この両章に於いて我々は、我々の狙いとす

るところの当時の実務慣習としての会計帳簿を看ることを得る。このことはサヴァリーの次の記述から容易に理解し得る。即ちサヴァリーは、自らの解説・例示する記帳手法について「これは決して私の考察した秩序ではない。私は、毎年四・五百万リーブルの取引を行う普通商人によりそれが実際に行われているところを見てきたのであり、現在に於いても依然として、それを几帳面に守っている人々が数多く存在している。」⁽¹¹⁾と述べている。そこで先ず、会計帳簿の種類に係るサヴァリーの解説を検討することとする。

サヴァリーは、王令の規定内容に則り商人が備え記帳すべき「唯一の帳簿」⁽¹²⁾として「日記帳 (Journal)」⁽¹³⁾に言及している。この帳簿は、サヴァリーによれば、小規模取引を行う普通商人の備えるべき帳簿であり、一冊でありながら異なる二つの内容を有している。すなわち曰く「小規模な取引を行う普通商人が用い得ることを要する帳簿は、掛による仕入および売上に役立ち得る。即ち、一方に於いては、彼らが掛および現金により仕入れる商品を、また彼らが借入れる金銭を、そして他方に於いては、彼らが掛により販売する商品を、また彼らが貸付ける金銭を、私が以下に於いて与えるその様式に従って、彼らは記載し得る。しかし、その形式に於いて帳簿が付けられるためには、それは王令第三章第三条に則り花押が記されねばならない。すなわち、仕入日記帳 (Journal d'achat) として役立つ一方と掛売上日記帳 (Journal de vente à credit) としての他方とに。さもないと裁判所に於いてその帳簿には信頼の全く置かれぬこととなる。そしてそれから、帳簿を綴じることが必要であり、その帳簿の中ほどには、仕入日記帳と掛売上日記帳とのそれぞれに役立つ二つの部分に分けるために厚紙すなわち羊皮紙が必要であることとなる。」⁽¹⁴⁾

さらにかかる一冊の帳簿についてサヴァリーは「それは二つの表題を必要とする」⁽¹⁵⁾として、一方にはその帳簿の表紙に「仕入及び支払日記帳 (JOURNAL d'achat & de paiement)」⁽¹⁶⁾なる表題を、他方にはその中ほどに挿入された羊皮紙に「掛売上及び金銭受取日記帳 (JOURNAL DE VENTE A CREDIT, & d'argent receu)」⁽¹⁷⁾なる表題を例示し、さらにそ

の帳簿の具体的な記帳例を示している。⁽¹⁸⁾ この例示からも明らかな如く、小規模取引を行う商人の備えるべき「唯一の帳簿」としてサヴァリーの解説する帳簿は、記載すべき取引内容の相違する二種類の帳簿を便宜上一冊に綴じたものにすぎず、実質的にそれは、異なる二種類の帳簿であると看做さねばならない。とすれば、ここに於いて我々は、王令の規定内容に従い、小規模取引を為す商人の備えるべき帳簿として「仕入及び支払日記帳」と「掛売上及び金銭受取日記帳」との二種類の帳簿の存することとなる。

またサヴァリーは「中規模の取引を行う普通商人」⁽¹⁹⁾の備えるべき会計帳簿について次の如く述べる。即ち「綾織綿布、綿入麻織物、綿毛交織物、英国産羅紗、飾り紐、平打紐、毛皮、食料品、その他、業務上生じる不都合により正確には秩序付け得ない種類の商品を混合して販売する普通商人に関して、彼らは三種の帳簿を持つだけで充分である。第一は仕入帳 (en livre d'achat) であり、そこに彼らは自らの日々仕入れる総ての商品を記載しなければならず、⁽²⁰⁾「また「更に彼らは、友人により自らに貸付られる金銭を、それが手形によるか又は証書によるかを示しながら、この帳簿に記載しなければならない。⁽²¹⁾」さらに「第二は掛売上日記帳 (en livre journal de vente à credit) であり、そこに商人は、自らが掛により販売する商品を、また自らがある人に貸付ける金銭を、やはり順を追って記載しなければならない。⁽²²⁾」そして「必要な第三の帳簿は現金帳 (un livre de Caisse) であり、商人は自らの受取る総ての金銭を、および支払う総ての金銭、家事費用にいたるまでをその帳簿に記載しなければならない。⁽²³⁾」

以上の解説から明らかな如く、中規模取引を為す商人の会計帳簿は、仕入日記帳と掛売上日記帳および現金帳の三種である。かかる三種の帳簿についてサヴァリーは、それぞれの帳簿の表題を「仕入及び支払日記帳 (JOURNAL d'achat & de paiement)」⁽²⁴⁾「掛売上及び金銭受取日記帳 (JOURNAL DE VENTE A CREDIT, & d'argent recu)」⁽²⁵⁾「現金帳 (LIVRE DE CAISSE)」⁽²⁶⁾と例示し、それぞれに係る具体的な記帳例をもあわせて示している。しかしながら、この三種

の帳簿のうち前二者の各日記帳についてサヴァリーは「記載される諸事項をより容易に見出すために」⁽²⁷⁾それぞれの帳簿のはじめに索引目録 (*un repertoire ou alphabet*) を付けることが必要である⁽²⁸⁾と述べ、そして当該目録、例えば「仕入及び支払日記帳」の目録について「そこには、混乱を避けるべく、商品および支払等について記載されている紙葉の丁数を示すために、そこから彼らが仕入れたあるいは金銭を借入れたところの人々の氏名を記さねばならぬ⁽²⁹⁾」と解説し、その具体例を与えている。要するに、サヴァリーいうところの三種の帳簿は、人名索引目録付「仕入及び支払日記帳」と人名索引目録付「掛売上及び金銭受取日記帳」そして「現金帳」ということとなる。

かくして、王令の規定内容に従い、中規模取引を行う商人の帳簿として、右の三種の会計帳簿の存在がここに明らかとなった。しかしながらサヴァリーは更に、右の兩日記帳の人名索引目録に相当する部分を、独立した一つの会計帳簿として扱う場合のその帳簿に係る次の如き解説をなす。即ち「より詳細な記録の作成を望まぬが故に、抄録帳 (*livres extraits*) を付けたがらぬ小売普通商人に対しては、私が先にその記帳例を与えたところの三種の帳簿で充分である。しかし私は、彼らが抄録・理由帳 (*un livre extrait ou de raison*) の備え付けを試みるものがより良いことであると思う。なんとすれば、その秩序は、日記帳のはじめに於いて存する索引目録に係る手法による前述の秩序よりも更に容易に保たれ得るからであり、それにより人は混乱を回避し得るからである。このことが、多少なりとも手広く取引を行う総ての普通商人がより以上の便宜のために抄録帳を通常備えている理由である。」⁽³⁰⁾ここに指摘された「抄録帳」あるいは「抄録・理由帳」なる帳簿に係りサヴァリーは、その記帳例を示すにさいし、その帳簿の表紙に「抄録・理由帳 (*LIVRE EXTRAIT, OU DE RAISON*)」なる表題を付している。⁽³¹⁾

以上の検討に基づき我々は、中規模取引を為す商人が王令の規定内容を踏まえ備うべき会計帳簿について、その種類・名称を次の如く示し得る。即ち、人名索引目録付「仕入及び支払日記帳」、人名索引目録付「掛売上及び金銭受

取日記帳」および「現金帳」の三種、あるいは「仕入及び支払日記帳」、「掛売上及び金銭受取日記帳」、「現金帳」および「抄録・理由帳」の四種である。かかる三種類の、また場合によっては四種類の会計帳簿が、王令の規定するところに基づく会計帳簿であることとなる。

さらにサヴァリーは、「大規模な取引を行う小売普通商人」⁽³²⁾あるいは「多少なりとも手広い取引を行う小売普通商人」⁽³³⁾が備えるべき会計帳簿について「自らの営業に於いて良き秩序を確立するために、金糸・銀糸・絹糸等織物の小売取引を行う人々が備えるべき帳簿は九種を数える。」⁽³⁴⁾と述べる。かかる帳簿の種類解説に際し、サヴァリーは特定の織物販売業者をその例に挙げているが、自らの解説するところの、商人全般に対して妥当することを彼は次なる記述を以て仄めかす。即ち「自らの営業に於いて良き秩序を保つために、金糸、銀糸及び絹糸織物の小売普通商人にとって前述の多数の帳簿が必要であるが、かなり手広く毛織物を扱う、同じ団体のその他の普通商人および羅紗商人の団体に属する個人にとってもまたそれは同様である。なんとすればその相違は、唯商品の質に於ける相違に過ぎぬからである。」⁽³⁵⁾

彼は、九種類⁽³⁶⁾の帳簿について、その名称を次の如く解説している。即ち「第一は彼らが仕入帳 (livre d'achat) と名付けている帳簿であり、それには彼らの仕入れる総ての商品を日々記載しなければならない。」⁽³⁶⁾「第二は、借方及び貸方を以て付けられる、仕入帳の抄録帳 (un livre extrait du livre d'achat) である。」⁽³⁷⁾「第三は日記帳 (un livre Journal) であり、そこには掛を以て販売された商品に関して総ゆる事を記載すべきである。」⁽³⁸⁾「第四は、借方及び貸方を以て付けられる、日記帳の抄録帳 (un livre extrait du Journal) である。」⁽³⁹⁾「第五は売上帳 (un livre du vente) であり、そこには現金にて販売された総ての商品が記載され、またそこには債務者から受取られた金銭の金額をも記載する。」⁽⁴⁰⁾「第六は金銭支払帳 (un livre d'argent paye) であり、そこに於いて商人は自らの支払う総ゆる金銭を記さねばならない。」⁽⁴¹⁾

「第七は、借方・貸方を以て付けられるべき現金帳 (*un livre de caisse*) であり、⁽⁴²⁾」第八は、借方・貸方を以てまた付けられるべき商品銘柄帳 (*un livre de numero*) である。⁽⁴³⁾」そして「染色帳 (*un livre de Teinture*)、それは必要なる第九の帳簿である。⁽⁴⁴⁾」

右がサヴァリーの解説する九種の帳簿の名称であるが、彼はこれら諸帳簿に加えて、更に必要なる二種類の帳簿に言及する。即ち曰く「前述された諸帳簿のほかに、控え帳 (*carnet*) と呼ばれている小帳簿を備えることが必要であり、そこに商人は自らの総ての債務を記載すべきである。⁽⁴⁵⁾」また「かなり手広く取引を行い、そして多くの貸付けを為している商人は、債務についてと同様に、自らの債権の控え帳を作成すべきである。⁽⁴⁶⁾」ここに示された二種類の控え帳に係りサヴァリーは、それらの具体的様式を例示し、それぞれの様式例に於いて「控え帳と呼ばれる債務帳 (*un livre des dettes passives appellé carnet*)」および「債権控え帳 (*Carnet de mes debtes actives*)」⁽⁴⁷⁾なる表題を示している。従って、かなり手広く取引を行う商人が、王令の規定内容に則り備えるべき帳簿は、前述の九種類にこの「控え帳」の二種類を加えた、全十一種類の会計帳簿であることがここに到って明らかとなる。

以上に於いて我々は、商事王令の規定する会計帳簿について、その種類を、それに係るサヴァリーの解説を検討することにより明らかにした。そこに於いてサヴァリーは、王令の規定内容を踏まえ、商人が備えるべき会計帳簿の種類を、商人の取引規模に着目して三段階に分けて解説している。すなわち、小規模取引を為す商人の会計帳簿は一冊ながら二種類、即ち「仕入及び支払日記帳」と「掛売上及び金銭受取日記帳」。中規模取引を為す商人の帳簿は三種あるいは四種類、即ち人名索引目録付「仕入及び支払日記帳」・人名索引目録付「掛売上及び金銭受取日記帳」・「現金帳」の三種、あるいは「仕入及び支払日記帳」・「掛売上及び金銭受取日記帳」・「現金帳」・「抄録・理由帳」の四種。相当手広く取引を為す商人の帳簿は十一種類、即ち「仕入帳」、「仕入帳の抄録帳」、「日記帳」、「日記帳の抄録帳」、

「売上帳」、「金銭支払帳」、「現金帳」、「商品銘柄帳」、「染色帳」、「控え帳と呼ばれる債務帳」、「債権控え帳」。商人は、かかる複数の帳簿の備え付けを、商事王令によって厳命されているのである。とすれば、ここに於いて問題は次の如くなる。即ち、かかる複数の会計帳簿を以て、商人が記録すべきものとは具体的には何であるのか。つまり、会計帳簿記録の本質解明に関わる問題である。この問題の解明の手掛りは、かかる諸帳簿に於いて、実際に何が記録されているのかを明らかにすることに求め得る筈である。そこで次節に於いては、かかる諸帳簿に実際に記録されているものの即ちその記録対象の解明を試みることにする。

注

- (1) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲)、九頁。
- (2)(3) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲)、一〇頁。
- (4) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲)、一一頁。
- (5) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲)、一一頁。
- (6) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲)、一一頁。
- (7) 商事王令第三章に含まれる残りの四箇条の規定内容は次の通りである。即ち、
 第七条 卸売・小売を行うすべての商人及び普通商人は、受取った書簡を束ね、自らが差出すそれらの写しを記録する
 ことを要す (Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲)、一二頁)。

第八条 すべての普通商人は更に、六箇月なる同期間内に於いて自署の下に、其の一切の動産、不動産及び債権並びに

債務の目録を調製し、二年毎に照合、更新することを要す (Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一二頁)。

第九条 破産の場合に於ける会社の相続、共有及び分割のためを除き、裁判所に於いては諸日記帳、諸記録簿又は諸目録の提示又は提出は、要請も命令もなされることを得ず (Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一二頁)。

第十条 それにも拘わらず、商人又は普通商人が其の諸日記帳及び諸記録簿を自らに役立てることを欲する場合又は当事者がそれらを信頼することを申し出たる場合には、争点に関わることをそれから抜粋するために、その提示は命令されることを得 (Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et de Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 一三頁)。

- (8) Ordonnances de Louis XIV. Roy de France et Navarre, sur le Commerce des Negotians & Marchands (前掲) 五頁。
- (9) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二四八—二六八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九八—三〇六頁。
- (10) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六八—二九八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇七—三二八頁。
- (11) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇七頁。
- (12) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二八頁。
- (13) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二三頁。
- (14) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九〇・二九一頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二二頁。
- (15)(16)(17) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二三頁。
- (18) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九二—二九七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二四—三二七頁。
- (19)(20) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇七頁。
- (21) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六九頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇七頁。
- (22) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七三頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三七一頁。
- (23) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二四頁。
- (24) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七〇頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇八頁。

- (25) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七四頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三一一頁。
- (26) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七九頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二五頁。
- (27) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三三四頁。
- (28) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六九・二七三頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇七・三一一頁。
- (29) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六九頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇八頁。
- (30) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二八二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二六頁。
- (31) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二八三頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二六・三二七頁。
- (32) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二四八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九〇頁。
- (33) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九七頁。
- (34) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九六・二九七頁。
- (35) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇六頁。
- (36)(37)(38)(39) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九六・二九七頁。

三 商事王令上の会計帳簿の記録対象

前節に於いて我々は、商事王令上の会計帳簿の種類を、小規模商人については二種、中規模商人については三種あ

るいは四種、比較的大規模な商人については十一種なることを、サヴァリーのそれに係る解説を抛り所として明らかにした。しかしながらそこでは、かかる複数の会計帳簿について、その各名称を列挙したに過ぎず、それら諸帳簿の実質的内容の検討を何等為し得なかった。そこで本節に於いては、前述の諸帳簿に係りサヴァリーの与える記帳例および記帳方法の解説に依拠して、諸帳簿の記録方法を検討し、それに基づきその記録対象を明らかにする。そして更にそこから商事王令上の会計帳簿記録の本質に迫ることとする。

小規模商人の会計帳簿の記録対象

そこでまず、小規模取引を為す商人の会計帳簿について、その記録方法を検討し、記録対象を明らかにする。サヴァリーに依れば、かかる商人の備えるべき帳簿、一冊ながらも二種類、すなわち「仕入及び支払日記帳」と「掛売上及び金銭受取日記帳」である。これら二つの帳簿に係り、サヴァリーの与える記帳例は次の通りである(次頁以下参照)。今、この記帳例に於ける記録内容を通観するならば、サヴァリーが七種類の取引例を以てこれら帳簿の具体的な記帳を例示していることが判る。即ち「仕入及び支払日記帳」にあつては、現金による商品仕入取引(七月二〇日・二月二〇日付の記録)、掛による商品仕入取引(七月一日同日・七月二〇日・八月二五日・一〇月二日付の各記録)、仕入に係る債務(掛)の履行の取引(二〇月一五日・二月二三日付の記録)および金銭借入に係る取引(二月一〇日付の記録)であり、「掛売上及び金銭受取日記帳」にあつては、掛による商品売上取引(七月一日・七月四日・七月一〇日・八月二〇日・八月二七日・九月一七日付の各記録)、売上に係る債権(掛)回収の取引(八月二〇日・八月二八日・九月一五日・一〇月一四日付の各記録)および金銭の貸付に係る取引(九月一日付の記録)である。そこで、各取引の記録方法を検討すべくこの二つの帳簿の記帳例の邦訳を次に示すことにする(但し、以下の検討にとって必要となる部分のみとし、それ以外の

1673.

*JOURNAL d'achat & de payement, commencé le premier
Juillet 1673..*

*AU NOM DE DIEU, soit commencé le present
livre d'achat, & de payement.*

Du premier Juillet 1673.

Acheté de Monsieur Pelot les marchandises

suivantes que je luy ay payées comptant.

6. douzaines de couteaux à 15. s. la douz.

L 4. 10.

3. douzaines de rasoirs à 36. la douz.

L 5. 8.

L 9. 18.

Dudit jour.

Acheté de Pierre Amelot Poudrier, pour lui payer dans trois mois,

prix fait,

20. livres de poudre pour les cheveux, à 10. s. la livre.

L 10.

6. grosses de savonnertes de Boulogne, à 3. l. la grosse.

L 18.

Deux livres de Pommade de jassemín, à 100. s. la livre.

L 10.

L 38.

Du 20. Juillet 1673.

Acheté du sieur Fremiot Marchand, pour payer dans un mois, prix
fait, six liv. de fil de Flandre, à dix liv. la livre,

L 60.

Six pieces de rouleau de fil fin, & incarnadin, conte-
nant trente douzaines, à quarante sols la douzaine,

L 60.

L 120.

Du 25. Aoust 1673.

Acheté du Sieur Morion; Marchand d'Amiens à la foire S. Laurent, pour payer dans trois mois, prix fait, quatre milliers de plumes d'Hollande à 15. liv. le millier,	L 60.
Deux milliers à 12. liv.	L 24.
Trois grosses d'écritoires à 16. liv. la grosse,	L 48.
	<u>L 132.</u>

Du 12. Octobre 1673.

Acheté du sieur Niguet, Marchand de Saumur à la foire S. Denys, pour payer à la foire S. Germain prochain, prix fait,	
20. douzaines de chapelets de gets, à 30. sols la douzaine,	L 30.
40. douzaines dit de bois noir, à 6. sols la douzaine,	L 12.
	<u>L 42.</u>

Du 15. dudit

Payé au sieur Fremiot pour tout ce que je luy dois, jusques à ce jourd'huy,	L 120.
---	--------

Du 10. Novembre 1673.

Je dois à Monsieur Patron 300. liv. qu'il m'a prestées ce jourd'huy pour laquelle somme je luy ay passé obligation pardevant tel Notaire ce jourd'huy; payable dans six mois, cy	L 300.
--	--------

Du 13. Novembre 1673.

Payé à Pierre Amelot poudrier 38. liv. pour tout ce que je luy dois, jusqu'à ce jourd'huy, cy	L 38.
---	-------

Du 20. Decembre 1673.

Acheté de Nicôlas Bois-d'amour, Marchand de Bressuire, à luy payé comptant deux pieces de certaines, à 15. liv. la piece,	L 30.
Trois pieces de baguettes jaune verte, & bleu, contenant 45. aunes, à 25. sols l'aune,	L 46. 5. s.
	<u>L 76. 5. s.</u>

1673.

JOURNAL DE VENTE À CRÉDIT,
& d'argent reçu, commencé le 1. Juillet 1673.

AU NOM DE DIEU, soit commencé le present livre
de vente à crédit, & d'argent reçu.

Du 1. Juillet 1673.

Doit Monsieur Saunier prix fait, une livre de poudre pour les che-	L 2.
veux,	
Six favonettes de Boulogne, à trois sols piece,	L 18. f.
Un pot de pommade de Jassemín de	L 1.
	<u>L 3. 18. f.</u>

Du 4. Juillet 1673.

Doit Jacques Pinot revendeur prix fait, demie livre de fil de Flan-	L 6.
dre,	
Vingt aunes de Rolleau, à quatre sols l'aune,	L 4.
	<u>L 10.</u>

Du 10. audit.

Doit le sieur de Chauvert Cabaretier, prix fait trois douzaines de	L 3.
couteaux à vingt sols la douzaine,	
Deux favonettes façon de Bologne,	L 10. f.
	<u>L 3. 10. f.</u>

Du 20. Aoust 1673.

Le Monsieur Sevin, Maître Ecrivain prix fait un millier de plu-	L 18.
mes de,	
Une douzaine de canifs de Tolose à cinq sols piece,	L 3.
	<u>L 21.</u>

Du 20. Août.

Receu de Monsieur Saunier trois liv. dix-huit sols, pour tout ce qu'il me doit, jusqu'à ce jour,

L. 3. 18. s.

Du 27. dudit.

Doit Maître Pierre Lullier Tailleur, prix fait deux aunes de baguete fine à trente sols,

L. 3.

Quatre aunes dit verte à trente sols,

L. 6.

Six aunes de tirtaines brunes à vingt sols.

L. 6.

L. 15.

Du 28. Août 1673.

Receu de Jacques Pinot six liv. à bon compte de ce qu'il me doit, cy

L. 6.

Du premier Septembre 1673.

Doit Jacques Fricot, Maître Cordonnier à Paris, trente livres que je lui ay presté ce jour d'huy, pour laquelle somme il m'a fait sa promesse, payable dans deux mois, cy

L. 30.

Du 15. dudit.

Receu de Jacques Pinot quatre liv. pour reste de ce qu'il doit, jusqu'à ce jour d'huy, cy

L. 4.

Du 17. dudit.

Doit Maître Pierre l'Huiller Tailleur, prix fait, six aunes de rouleau bleu, à trois sols,

L. 18. sols.

Deux aunes de tirtaine à vingt sols,

L. 2.

Quatre onces de fil de Flandre à quinze sols,

L. 3.

L. 5. 18. sols.

Du 4. Octobre 1673.

Receu de Maître Pierre l'Huiller Tailleur, quinze liv. sur estant moins, ou à bon compte, de ce qu'il me doit,

L. 15.

1673年

1673年7月1日に開始された、仕入及び支払の日記帳

神の名に於いて、仕入及び支払に係る当帳簿は始められる。

1673年7月1日

仕入、プロー氏より、私が彼に現金にて支払った

ところの以下の商品を、

6. ダースのナイフ, 1 ダースあたり15.s.にて,	L 4. 10.
3. ダースの剃刀, 1 ダースあたり36.にて,	L 5. 8.
	<u>L 9. 18.</u>

同 日

仕入、白粉商人ピェール・アムローより、3ヶ月後彼に支払うものとして、

価格決定、

20. ポンドの毛髪用粉, 1 ポンドあたり10.s.にて,	L 10.
6. グロスのブルゴーニュ産化粧石鹼, 1 グロスあたり3.l.にて,	L 18.
式ポンドのジャスミンポマード, 1 ポンドあたり100.s.にて,	L 10.
	<u>L 38.</u>

⋮

1673年10月12日

仕入、ソミュールの商人ニゲー氏より、サン・ドゥニの定期市に於いて、次のサン・ジェルマンの定期市に於いて支払うものとして、価格決定、

20. ダースのジュツ産数珠, 1 ダースあたり 30. スーにて,	L 30.
40. ダースの黒木のもの, 1 ダースあたり 6. スーにて,	L 12.
	<u>L 42.</u>

⋮

1673年11月10日

私は、パトロン氏に対して、本日彼が私に貸付けたところの 300.liv.を負う。かかる金額について、本日某公証人立会の下に、6ヶ月後に支払うべき債務契約を私は彼と結んだ。すなわち

L 300.

1673年11月13日

支払、白粉商人ピェール・アムローへ 38. liv. 本日までに私が彼に負っているすべてのものについて、すなわち

L 38.

1673年12月20日

⋮

1673年

1673年7月1日に開始された、金銭受取及び掛売上日記帳

神の名に於いて、金銭受取及び掛売上に係る当帳簿は始められる。

1673年7月1日

払うべし、ソーニエ氏は以下の価格を、1ポンドの毛髪用粉、	L 2.
6個のブルゴーニュ産化粧石鹸、1個あたり3スーにて、	L 18.s.
1瓶のジャスミンポマード、	L 1.
	<u>L 3.18.s.</u>

1673年7月4日

払うべし、仲買人ジャック・ピノーは以下の価格を、半ポンドのフランドル産の燃糸、	L 6.
20オーヌの巻物、1オーヌあたり4スーについて、	L 4.
	<u>L 10.</u>

⋮

8月20日

受取、ソーニエ氏より 3 liv. 18 スー、本日まで彼が私に支払うべき総てのものにかかわり	<u>L 3.18.s.</u>
---	------------------

⋮

1673年8月28日

受取、ジャック・ピノーより 6 liv. 彼が私に支払うべきものの内金として、すなわち、	<u>L 6.</u>
--	-------------

1673年9月1日

払うべし、パリの靴屋主人ジャック・フリコーは、本日私が彼に貸付けたる30リーブルを、かかる金額について彼は私に2ヶ月後払いの約束を取りかわした、すなわち、	<u>L 30.</u>
---	--------------

同 15日

受取、ジャック・ピノーより 4 liv. 本日まで彼が支払うべきものの残にかかわり、	<u>L 4.</u>
--	-------------

⋮

1673年10月4日

⋮

部分は点線を以て邦訳を省略している。

この記帳例についてサヴァリーは次の如く述べる。即ち、先ず「仕入及び支払日記帳」に係り「支払われた金銭あるいは借入れられた金銭、及び仕入に係る日記帳の前述の如き様式は、存在し得る如何なる種類の商品であろうともそれを取引する総ての種類の商人に対して、同様の帳簿を作成するための、またそれについて言及された凡ゆることを守るための記帳例として役立ち得る。」⁽²⁾と、また「掛売上及び金銭受取日記帳」に係り「前述の様式に於いて示された手法によって、掛売上および金銭の受取・貸付に係る日記帳を付け得ぬが如き分別の無い商人は存在しない。」⁽³⁾と。この解説より明らかな如く、小規模取引を為す商人は、自らの營業に於いて生じた全取引を二つに分類し、それぞれを二種類の帳簿に分けて記録しているのである。即ち、一方の帳簿には仕入および金銭支払・借入に係る取引を、他方には掛売上⁽⁴⁾および金銭受取・貸付に係る取引をそれぞれ記録しているのである（各取引の具体的な記録方法については前掲邦訳を参照されし）。

右の如き、取引内容に基づく記録方法によって、この両帳簿は「一方に於いて、彼らが掛および現金にて仕入れる商品を、また彼らが借入れる金銭を」⁽⁵⁾さらには「商品の仕入並びに金銭の借入に係り彼らの負うているもの」⁽⁶⁾を、「他方に於いて、彼らが掛により販売する商品を、また貸付ける金銭を」⁽⁷⁾記載すると述べることにより、サヴァリーはこの両帳簿の記録対象を指摘している。しかし、彼の与える記帳例によれば、この両帳簿は、商品の現金仕入・掛仕入・掛販売、金銭の支払・受取・借入・貸付の各取引について、その取引の生じた日付、取引金額、取引相手の氏名、商品の種類（名称）・数量・単価、仕入・借入債務、売上・貸付債権等々、各取引に係る様々な事柄を記録していることも明らかに看取り得る。従って、この両帳簿に記録されている一切の事柄が、小規模取引を為す商人の会計帳簿の記録対象であると考えることを要す。

とすれば、これら多数の記録対象を持つ会計帳簿に就いて、その記録の本質を如何に規定し得るかが問題となる。そこで我々は、かかる多数の記録対象のうちの何れかが、会計帳簿記録の本質に係る重要なものであるという観点に立ち、その記録対象の究明を試みることにする。かかる観点に立つ時、前述の二つの会計帳簿に係り為された、サヴァリーの次なる追加的解説が注目値する。即ち、二つの帳簿に於いて「記載された事項をより容易に見出すために良かれと思うなら彼らは、各々の側に索引目録を設け得るのであり」⁽⁸⁾そして「そこに彼らは、現金または掛で以て商品仕入れた、あるいは金銭を借入れた場合に帳簿上に於いて言及されている人々の氏名を記さねばならない」⁽⁹⁾ここに於いて、前述の二つの帳簿それぞれに、人名索引目録の添附し得ることが判る。とすれば、かかる目録作成の意図するところに、会計帳簿記録の本質に係る重要な記録対象を見出し得るのではなからうか。この人名索引目録の備付けは、サヴァリーがその記録例をもって解説するところの、中規模取引を為す商人の会計帳簿に於いて実践されている。そこで次に、かかる商人の会計帳簿について、その記録方法を検討し、その記録対象の解明を試みることにする。

中規模商人の会計帳簿の記録対象

サヴァリーに依れば、中規模取引を為す商人の帳簿は三種類すなわち、人名索引目録付「仕入及び支払日記帳」、同目録付「掛売上及び金銭受取日記帳」および「現金帳」、あるいは四種類すなわち、「仕入及び支払日記帳」、「掛売上及び金銭受取日記帳」、「現金帳」および「抄録・理由帳」である。かかる複数の帳簿のうち、前者三種類の場合の両日記帳および後者四種類の場合の両日記帳の記録方法の解説のために、サヴァリーの与えている二種類の日記帳すなわち「仕入及び支払日記帳」、「掛売上及び金銭受取日記帳」の記録例は次の通りである⁽¹⁰⁾（次頁以下参照）。そして、

1673.

JOURNAL d'achat & de payement, commencé le premier
Juillet 1673.

AV NOM DE DIEU, soit commencé le present
livre d'achat, & de payement.

Du premier Juillet 1673.

Au sieur Pierre Arnould les marchandises cy-après qu'il m'a ven-
dus pour payer dans trois mois.

E. N° 1. f. 1.	Futaine blanche à poil.	p 1 } p 1 } à 16. livres	L 32.
200.	Droquet brun du Lude, aune 30 } aune 54.		L 81.
202.	dit aune 24 } à 30. f.		L 113.

Du 4. dudit

2

Au sieur Jacques Armand les marchandises cy-après qu'il m'a
E. N° 1. f. 1. vendus pour payer dans la fin du mois.

4 pieces de rubans noir ; portées à.	L 60.
15 l. la piece.	
6 pieces de galon noir contenant 80 douz.	L 120.
à 30 f. la douz.	L 180.

Du 6. Aoust, 1673. —

E. N^o 1. f 1

Au sieur Nicolas Boucault les marchandises cy - après qu'il m'a
venduës comptant. 3

2 pieces de basin, doub. le lion à 18 l. la piece. L 36.

2 pieces B à 17 l. piece. L 34.

3 pieces C à 16 l. piece. L 48.

L 118.

E. N^o 1. f 1 Payé ledit jour audit sieur Boucault les 118 l. pour le contenu aux
marchandises cy-dessus, en me livrant la marchandise.

Du 20. Aoust 1673. —

E. N^o 1. f 1 Payé au sieur Jacques Armand 180 l. pour toutes les marchandises
qu'il m'a venduës jusques à ce jourd'huy, cy L 180

Du 21. dudit —

E. N^o 1. f 1 Du sieur François Barbe les marchandises cy-après qu'il m'a ven-
duës, pour payer dans trois mois. 5

1 piece de toile de Gan, aul. 40. à 40. f. L 80.

1 piece dit aul. 35 à 30 f. L 32. 10.

4 pieces de toile de cotton blanche à 20. l. p. L 80.

2 pieces dites noires à 19. l. L 38.

L 250. 10. f.

Du 15. Octobre 1673. —

E. N^o 1. f 1 Payé au sieur Pierre Arnaut 63. l. à bon compté, de ce que je luy
dois, pour les marchandises qu'il m'a cy-devant venduës, cy. L 63.

Du 20. dudit

7

E. N° 1. f° 1. Payé au sieur Pierre Arnaut 50. l. pour restc de ce que je luy dois
jusques à ce jourd'huy, cy L 50.

Du 2. Decembre 1673.

8

E. N° 1. f° 1. Payé au sieur François Barbe 250. l. 10. s. pour tout ce que je luy dois,
jusques à ce jourd'huy, cy L 250. 10. s.

Du 4. dudit

9

E. N° 1. f° 1. Au sieur Pierre Arnaut les marchandises cy-après qu'il m'a vendues
pour payer dans trois mois.

1 pièce basin double Lyon de	L 18.
1 pièce de futaine à grains d'orge, aune 20. à 30. s. l'aune	L 30.
	<u>L 48.</u>

Pour laquelle somme je luy ay fait mon billet ce jourd'huy, payable
dans trois mois.

Du 8. Decembre 1673.

10

Au sieur Nicolas Auvray 300. l. qu'il m'a ce jourd'huy presté, pour
laquelle somme je luy ay fait ce jourd'huy ma promesse, ou passé obli-
gation pardevant tel Notaire, payable dans un an, cy L 300.

1673.

JOURNAL DE VENTE A CREDIT,
& d'argent reçu ; commencé le premier Juillet 1673.

AV NOM DE DIEU, soit commencé le premier livre
journal de vente à credit, & d'argent reçu.

Du premier Juillet 1673.

		1
Doit Monsieur Bertault Maître des Comptes, à luy livré, prix fait,		
E.N ^o 1. f ^o 2	10. aunes de droguet du Lude, pour faire habit & manteau, à 35. f. l'aune.	L 17. 10. f.
	4. aunes de toile de cotton grise pour doubler les chausses & le pourpoint, à 30. f. l'aune.	L 6.
		L 23. 10. f.

Du 7. Juillet 1673.

		2
E.N ^o 1. f ^o 2. Doit le sieur Pierre Contant Maître Tailleur, prix fait,		
	8. aunes basin double, Lyon, à 40. f.	L 16.
	6. aunes de futaine blanche à 20. f.	L 6.
	12. aunes de gallon noir à 3. f.	L 1. 16.
	8. onces de soye noire, à coudre, à 20. f. l'once.	L 1. 8.
		L 31. 16.

De laquelle somme il a fait promesse ce jour d'huy, payable dans 3. mois.

Du premier Aoust 1673.

		3
E.N ^o 1. f ^o 2. Doit Monsieur Dursaut Secrétaire du Roy, livré à la Vigne Tailleur.		
	60. aunes de ruban noir de Paris, pour faire des gallants, à sept sols l'aune.	L 21.
	10. aunes de futaine blanche, pour faire trois camisolles, à 20. sols l'aune.	L 10.
	6. aunes dit à grain d'orge Isabelle, pour faire des pourpoints à ses deux Lacquais, à 25. l'aune.	L 7. 10.
		L 38. 10.

Dudit jour

4

E. N° 1. f° 2 Doit Monsieur Bertaut. livré à Picard son Lacquais, suivant sa rescrip-
tion en datte de ce jourd'huy,
6. aunes de baracan de Flândres gris brun, pour faire
un manteau, à 4. l. 10. s. l'aune. L 27.
4. aunes de ras de Châlons gris pour le doubler, à 3. livres
dix sols l'aune. L 14.
L 41.

Du 4. Septembre 1673.

5

E. N° 1. f° 2 Receu de Monsieur Dursaut Secrétaire du Roy, 36. l. pour tout ce qu'il
doit jusques à ce jour. Fait quittance. cy L 36.

Du 8. Septembre 1673.

6

Doit Monsieur Jacques Bernard Marchand à Paris, la somme de mil
livres à luy prestée ce jourd'huy, pour laquelle somme il m'a passé
obligation pardevant tel, Notaire au Chastelet de Paris, payable
dans un an. cy L 1000.

Du 10. Octobre 1673.

7

E. N° 1. f° 2 Monsieur Bertaut a fait un transport à mon profit, avec garantie, de
la somme de 64. l. 10. s. à prendre & recevoir de Jacques Tauxier
Fermier de la Terre de Lagny, pour demeurer quitte de ce qu'il
doit de tout le passé jusques à ce jour. cy L 64. 10. s.

Du 28. dudit

8

E. N° 1. f° 3 Doit Monsieur Bertaut, livré à Champagne son Laquais, suivant sa
rescription en datte de ce jour,
8. aunes ras de Châlons pour faire habit & manteau audit sieur,
à 3. l. 10. s. l'aune. L 28.
4. aunes de toile de coton blanche pour doubler, à 30. s. L 6.
L 34.

Du 29. Octobre 1673.

9

E. N^o 1. f. 2 Recçu de Jacques Tauxier Fermier de la Terre de Lagny, 64. l. 10. s.
suivant le transport de Monsieur Bertaut à luy rendu. Fait quit-
tance. cy L. 64. 10. s.

Du 30. dudit

10

E. N^o 1. f. 2 Recçu de Pierre Contant, Tailleur d'habits; une lettre de change de
la somme de 31. l. 16. s. tirée par Guillaume de Paris, sur François
Marchand de la ville de Lyon, payable audit Contant ou à son or-
dre, à 8. jours de veuë, au dos de laquelle il a passé son ordre à mon-
profit, pour demeurer quitte de ce qu'il me doit jusqu'à ce jour
d'huy, cy L. 31. 16. s.

Du 4. Novembre 1673.

11

E. N^o 1. f. 2 Doit Pierre Contant Tailleur d'habits, prix fait.
Une piece de ruban de Tours, trois portées de L. 16.
Deux aunes de futaine grise, à vingt sols. L. 2.
L. 18.

Du 15. dudit

12

E. N^o 1. f. 2 Recçu de François de la ville de Lyon 31. liv. 16. sols, pour lettre qui
m'a esté fournie sur luy par Pierre Contant Tailleur, laquelle j'ay re-
ceüe par les mains du Sieur Picque, à qui je l'avois donnée à recevoir
en vertu de mon ordre, cy L. 31. 16.

「仕入及び支払日記帳」の人名索引目録

A	Le fleur Pierre Arnault.	f ^o 1 : 6 : 7 : S : 9
	Le fleur Jacques Armand.	f ^o 2 : 4 : S
	Nicolas Auvray.	f ^o 10 :
B	Le fleur Nicolas Boucault.	f ^o 3 : S
	Le fleur François Barbe.	f ^o 5 : 8 : S

この二つの帳簿の記帳例に於いてサヴァリーの用いている取引事例は次の通りである。即ち「仕入及び支払日記帳」に於いては、商品の仕入に係り、掛による場合（丁数一・二・五の記録）・現金による場合（丁数三の記録）・手形の振出による場合（丁数九の記録）、現金による掛の支払（丁数四・六・七・八の記録）、金銭の借入（丁数一〇の記録）、また「掛売上及び金銭受取日記帳」に於いては、掛による商品の売上（丁数一・二・三・四・八・一一の記録）、売上債権（掛）の移転（丁数七の記録）、掛の回収に係り、現金による場合（丁数五の記録）・為替状による場合（丁数一〇の記録）、現金による債権の回収（丁数九・一二の記録）、金銭の貸付（丁数六の記録）である。

以上の取引事例からなるこの二つの日記帳の記帳例に従って先ず、人名索引目録付の二種類の日記帳について、その記録方法を検討する。そこで、かかる両日記帳を、前述の小規模取引を為す商人のそれとの比較に於いて見るならば、この両日記帳の特徴の、いうまでもなく、その各々に添附されるところの人名索引目録に存することが判る。従って以下に於いては、この人名索引目録について、その記録方法を専ら検討することになる。サヴァリーは「仕入及び支払日記帳」に添附される当該目録について次の如く述べる。即ち「帳簿のはじめに索引目録を付けることが必要であり、そこには、商品および支払の記載されている紙葉の丁数を示すために彼らが商品を仕入れた先の、あるいは金銭を借入れた先の人々の氏名を記さねばならない。」⁽¹¹⁾そして、彼はこの帳簿の記帳例を示すにあたり「先ず、索引目録が通常

「掛売上及び金銭受取日記帳」の人名索引目録

A Monsieur Bertault.	f° 1. 4. 7. 8. 9.
B Monsieur Jacques Bernard.	f° 6.
C Pierre Contant.	f° 2. 10. 11. 12. S
D Monsieur Durfault.	f° 3. 5. S

行われている如くに帳簿の始まりの部分に存すべきである⁽¹²⁾として前頁上掲の如きその目録の例を示している。そして更に、この目録の記載方法について「仕入れた先の商人の氏名を、その商人の氏の最初の文字に応じて斯くの如く書かねばならない。そして、商品の仕入が帳簿に記録されるにつれて、その丁数 (folio) を氏名の端に記さねばならない。」⁽¹³⁾と解説している。また、「掛売上及び金銭受取日記帳」に添附される同様の索引目録についても「仕入日記帳に於けると同様に、帳簿の始まりの部分に、その帳簿に含まれる債務者の氏名をそれに書くために索引目録が必要である」⁽¹⁴⁾として上の如きその例を示している。

サヴァリーの斯くいうところから、「索引目録」が「仕入及び支払日記帳」、「掛売上及び金銭受取日記帳」のそれぞれの始まりの部分に置かれ、その目録への記入が当該日記帳への記入に基づきなされること、また前者の日記帳の目録がその日記帳に記録される債権者氏名の一覧表であり、後者のその目録が当該日記帳に記録される債務者氏名の一覧表であることを理解し得る。実際に、サヴァリーが例として示している両索引目録はその記録内容に於いて、前掲の両日記帳の記録内容と完全に一致している。サヴァリーは債権者氏名を一覧した索引目録について更に「ある取引が精算された場合には、索引目録に於いて借入または支払に係る紙葉を示す数字の上に線を引き、そして、その項目が精算され、最早支払うべきものが何等ないことを示すべく『S』という文字を書かねばならない。また、それ以後いくらかの

取引が記帳された場合には、『S』の後にその丁数の記載を必ず続けなければならない⁽¹⁵⁾と解説し、かかる記載方法の例として当該目録に於けるピエール・アルノー (Pierre Arnault) に係る部分の参照を指示している⁽¹⁶⁾。そこで我々は、当該目録全体とサヴァリーのいうピエール・アルノーなる人物に係る日記帳上の取引記録とを合わせて、その邦訳を次に示すことにする (77頁参照)。

またサヴァリーは、「掛売上及び金銭受取日記帳」の、債務者氏名を一覧した索引目録に係り「彼らは自らに支払われるべきものが何等無いか否かを知るために、仕入及び支払日記帳の索引目録に関して先に示されたと同様の秩序を守るべきである。すなわち、そこに記されている人物が支払をなし、『S』という文字に至り彼が自らの支払うべき借金を精算した (Solde) ということを示すために、また、その文字の後に書かれている丁数により示される事項のみをその人物が日記帳に於いて負うているということを示すために、そこに記されている丁数を抹消し、更に『S』という文字を記載すべきである⁽¹⁷⁾。」と述べる。ここにサヴァリーの解説しているところの例として我々は、当該目録全体とピエール・コンタン (Pierre Contant) に係る取引記録とを合わせ、その邦訳を次に示す (78頁参照)。

以上に於ける検討から、二つの日記帳各々への人名索引目録添附の意義を次の如く解し得る。すなわち、「仕入及び支払日記帳」に添えられる人名索引目録は、当該日記帳に記録されている諸取引に於ける仕入債務 (手形債務)・借入債務の発生・消滅を、それに係る取引相手の人名別に、それに係る取引記録の当該日記帳丁数と『S』の文字とを以て表わしている。また「掛売上及び金銭受取日記帳」の人名索引目録は、当該日記帳上の諸取引記録に於ける売上債権 (手形債権)・貸付債権の発生・消滅を、それに係る人名別に、当該日記帳丁数および『S』を以て表わしている。要するに、前者日記帳の人名索引目録は当該日記帳に於ける債務の発生および消滅を、後者の同目録は当該日記帳に於ける債権の発生及び消滅を示すために、それぞれの日記帳に添附されているのである。とすれば、両日記帳のそれ

1673年

1673年7月1日に開始された、仕入及び支払の日記帳

神の名に於いて、仕入及び支払に係る当帳簿は始められる。

A	ピエール・アルノー (Arnault) 氏	f° 1:6:7:S:9
	ジャック・アルマン (Armand) 氏	f° 2:4:S
	ニコラ・オーブレ (Auvray)	f° 10:
B	ニコラ・ブーコー (Boucault) 氏	f° 3:S
	フランソワ・バルベ (Barbe) 氏	f° 5:8:S

1673年7月1日

1

ピエール・アルノー氏より、3ヶ月後に支払うものとして、彼が私に売り渡した以下の商品を。

髷付白色綿入麻織物。	1p	} 単価 16. リーブル	L 32.
同上	1p		
リュード産褐色綿毛交織物，	30オーヌ	} 54オーヌ 単価 30 s.	L 81.
同上	24オーヌ		
			<u>L 113.</u>

⋮

1673年10月15日

6

支払、ピエール・アルノー氏へ 63. l. 以前彼が私に売り渡した商品について、私が彼に支払うべきものの内金として、すなわち、

L 63.

同20日

7

支払、ピエール・アルノー氏へ 50. l. 本日までに私が彼に支払うべきものの残について、すなわち

L 50.

⋮

同(12月)4日

9

ピエール・アルノー氏より、3ヶ月後に支払うものとして、彼が私に売り渡した以下の商品を。

1反のリヨン産二枚重綾織綿布	L 18.
1反の大麦模様綿入麻織物，20. オーヌ，1オーヌにつき 30. s. にて	L 30.
	<u>L 48.</u>

上記金額について、本日私は彼に3ヶ月後払いの私の手形を作成した。

⋮

1673年

1673年 7 月 1 日に開始された、金銭受取及び掛売上日記帳

神の名に於いて、金銭受取及び掛売上に係る当日記帳は始められる

A	ベルトー (Bertault) 氏	f° 1. 4. 7. 8. 9.
B	ジャック・ベルナール (Bernard) 氏	f° 6.
C	ピエール・コンタン (Contant)	f° 2. 10. 11. 12. S
D	デュルソー (Dursault) 氏	f° 3. 5. S

⋮

1673年 7 月 7 日

2

払うべし、仕立屋主人ピエール・コンタン氏は以下の価格を、

8 オースのリヨン産、二枚重綾織綿布、単価 40. s.	L 16.
6 オースの白色綿入麻織物、単価 20. s.	L 6.
12 オースの黒色飾り紐、単価 3. s.	L 1. 16.
8 オンスの縫製用黒絹糸、1 オンスあたり 20. s. にて	L 8.
	<u>L 31. 16.</u>

上記金額について、本日彼は 3 ケ月後払いの約束を為した。

⋮

同 (10月) 30日

10

受取、衣服仕立屋ピエール・コンタンより、パリのギョーム振出リヨン市商人フランソワ宛同コンタン受取の 31. l. 16. s. の金額の為替証書を、これはコンタンの指図付一覧後 8 日払のものであり、本日までに彼が私に支払うべきものの返済猶予のために、その裏書に於いて、彼は私の受取を指図している、すなわち

L 31. 16. s.

1673年 11 月 4 日

11

払うべし、衣服仕立屋ピエール・コンタンは以下の価格を、

1 巻のトゥール産平打紐、	L 16.
2 オースの灰色綿入麻織物、単価 20 スー、	L 2.
	<u>L 18.</u>

同 15日

12

受取、リヨン市のフランソワより、31. liv. 16. スー、仕立屋ピエール・コンタンによって私に渡された、同フランソワ宛の証書について、私の指示によって受取るべくそれを与えておいたピック氏の手を経て私はそれを受取った、すなわち

L 31. 16.

その記録対象のうちから、両日記帳記録の本質に係る、重要な記録対象をここに明示し得ることとなる。即ちそれは、商人の為す取引に於いて発生・消滅する仕入・借入債務であり、また売上・貸付債権である。

ここに到り我々の得た右の検討結果は、前掲の二種類の日記帳に添附される人名索引目録への着目、その作成・記載方法の検討を経て得られた帰結であるが、しかしサヴァリーは、かかる索引目録の各日記帳への添附よりも更に望ましいものとして「抄録・理由帳」なる帳簿の備え付けを勧めている。即ちサヴァリー曰く「私は、彼らが抄録・理由帳の備え付けを試みる事がより良いことであると思う。なんとすれば、その秩序は、日記帳のはじめに於いて存する索引目録に係る手法による前述の秩序よりも更に容易に保たれ得るからであり、それにより人は混乱を回避し得るからである。」⁽¹⁸⁾ さらに曰く「(この抄録・理由によれば)商人は、自らが支払うべきもの及び自らに支払われるべきものの一切を一覧の下に見るが、索引目録による秩序——この場合には、日記帳の総ての紙葉を捲り、そこから該当する項目を個々に引出さねばならないのだが——によつてはそれがそれほど容易には為されぬことを知る。」⁽¹⁹⁾ そこで我々は、前段に於いて得た検討結果を更に確かなものとすべく、以下に於いて、サヴァリーの言う「抄録・理由帳」なる帳簿について、その記録方法を検討することとする。

かくて我々の検討すべきは「抄録・理由帳」の記録方法となるが、それに先立ち、次のサヴァリーの指摘に注目することを要す。即ち「現金勘定 (le compte de caisse) は、これを特別なものとして備える必要はなく、同じ抄録帳に含まれる。もし人が望むならば、かくして備えるべきは三種の帳簿のみである。すなわち、それに支払ったもの及び借入れたものをも記入する仕入日記帳。掛販売した商品及び貸付けた金銭をも記入する掛売上日記帳。およびこの二つの日記帳に係る抄録帳である。小売を行う商人は少なくともこれだけの帳簿を備えなければならない。」⁽²⁰⁾ 我々が既に見た如く、中規模取引を為す商人の会計帳簿は、人名索引目録付の二種類の日記帳と「現金帳」との合わせて三種

1°

73.

DE RAISON, DE MOY
Marchand à Paris.

P.

1673

Avoir ledit sieur Arnaut.

1. Juillet. L. 113. pour marchandise pour 3. mois, appert au journal
d'achat; f. 1. L. 113.

4. De- Pour marchandise pour 3. mois appert au journal d'achat, f. 9. L. 48.
cembre.

1673

Avoir ledit sieur Armand.

4. Juillet. L. 180. pour marchandise pour payer à la fin du mois, appert au jour-
nal d'achat, f. 2. L. 180.

1673

Avoir ledit sieur Boucant.

6. Août. L. 118. pour marchandise pour comptant appert au journal d'achat,
f. 3. L. 118.

1673

Avoir ledit sieur Barbe,

1. Août. L. 250 : 10. pour marchandise pour payer dans trois mois, appert au
journal d'achat, f. 5. L. 250 : 10.

N°

LIVRE EXTRAIT, OU
Jacques Picart,
I.

1673

Le sieur Pierre Arnaut doit donner,

15. Octobre	Payé comptant à bon compte au journal,	f. 6. L. 63.
20. dudit.	Payé comptant pour solde, appert au journal,	f. 7. L. 50.
		<u>L. 113.</u>

1673

Le sieur Jacques Armand doit donner,

20. Aoust.	Payé comptant pour la partie cy-contre,	f. 4. L. 180.
	appert au journal d'achat,	

1673

Le sieur Nicolas Boucaut doit donner,

6. Aoust.	Payé comptant pour la partie cy-contre,	f. 4. L. 118.
	appert au journal d'achat,	

1673

François Barbe doit donner,

2. Decem- bre.	Payé comptant pour la partie cy-contre,	f. 8. L. 250. 10.
	appert au journal d'achat,	

1673

Avoir ledit sieur Auvray.

8. Decemb. L 300, par ma promesse de ce jour, pour payer dans un an, appert au
journal d'achat, f. 10. L. 300.

1673

Avoir ledit sieur Bertaut.

29. Oâobre. Reccu comptant de Jacques Tauxier son Fermier; appert au journal
de vente, f. 9. L. 64. 10.

Porté cy-après f. 3.

1673

Avoir ledit Contant.

15. Nov. Reccu comptant du sieur François de Lyon, en vertu de la lettre qu'
m'avoit esté fournie par ledit Contant, appert au journal
de vente, f. 12. L. 31. 16.

1673

Avoir ledit sieur Darsaut.

4. Sept. L 36. receu comptant, appert au journal de vente, f. 5. L. 36.
L 2. 10. que je luy ay déduit sur la marchandise; f. 38. L. 2. 10.

1673

Nicolas Auvray doit donner,

1673

Monsieur Bertaut Maître des Comptes doit donner,

1. Juillet.	Pour marchandise appert au journal de vente,	f 1. L. 23. 10.
1. Aoust.	L 41. pour marchandise, appert au journal de vente,	f 4. L. 41.
		<u>L 64. 10.</u>
10. Octobre.	Ledit sieur m'a fait ce jourd'hui un transport de L 64. 10. sur Jacques Tauxier son Fermier, appert au journal de vente,	f 7.

1673

Pierre Contant, Tailleur, doit donner,

7. Juillet.	Pour marchandise suivant sa promesse, payable dans trois mois, appert au journal de vente,	f 2. L. 31. 16.
30. Octobre.	Ledit Contant m'a fourny lettre de 31. l. 16. f. sur François de Lyon, appert au journal de vente,	f 10.
4. Novembre.	L 18. pour marchandise, appert au journal de vente,	f 11. L. 18.

1673

Monsieur Dursaut Secrétaire du Roy, doit donner,

31. Aoust.	L 38 10 f. pour marchandise, appert au journal de vente,	f 38. 10.
------------	--	-----------

1673

Avoir ledit sieur Bernard.

1673

Avoir ledit sieur Bertaut.

1673

1673

Monsieur Jacques Bernard Marchand à Paris, doit donner,

8. Septem- L 1000. Presté audit sieur par obligation de ce jour, payable dans un
bre. an, appert au journal de vente, f 6. L 1000.

1673

Monsieur Bertaud doit donner,

Outre cy-devant, f 2.
L 34. pour marchandise, appert au Journal de vente, f 8. L 34.

1673

CAISSE

le premier Juillet 1673.

1673.		CAISSE DOIT AVOIR	
6. Aoust,	Payé au Sieur Boucaut	L 118.	
20. dudit	Payé à Jacques Armand,	L 180.	
15. Octob.	Payé au Sieur Pierre Arnaut,	L 63.	
20. dudit	Payé audit Sieur,	L 50.	
2. Decemb.	Payé à François Barbe,	L 250. 10. sols.	
31. dudit	Payé pour la dépense de ma maison depuis le premier Juillet dernier jusqu'au 31. Decem- bre 1673.	L 1500.	
	4206. liv. six sols pour solde porté en debit,	L 4206. 6. sols.	
	en compte nouveau, fol. 2. cy	L 6367. 16. sols.	
		CAISSE DOIT AVOIR	2.

LIVRE DE

commencé

1673.

CAISSE DOIT DONNER

1

1. Juillet.	Mon fond capital	L 6000.	
4. Septemb.	Du Sieur Dufault.	L 36.	
4. Novemb.	Du Sieur Picart comptant	L 31.	16 fols.
8. Decemb.	Du Sieur Nicolas Auvray.	L 300.	
		<u>L 6367.</u>	<u>16 fols.</u>

CAISSE DOIT DONNER

2

4206. liv. six fols, pour solde de compte Creditice à fol. 1. & debitrice en ce compte nouveau.	cy	<u>L 4206. six fols.</u>
---	----	--------------------------

類、あるいは人名索引目録にかえて「抄録・理由帳」をそれらに加えた四種類であった。しかしながら、右のサヴァリーの指摘から、かかる四種類は、実は三種類の帳簿であつたことが判る。即ち、「現金帳」、サヴァリーここに言うところの「現金勘定」は、「抄録・理由帳」の中に含まれ得るのである（「抄録・理由帳」にかえて人名索引目録を備える場合には、「現金帳」を独立させて備えることとなる）。従つて我々は以下に於ける「抄録・理由帳」の記録方法の検討に際し、あわせて「現金帳」についてもその記録方法を検討していくことが必要となる。

サヴァリーは「抄録・理由帳」および「現金帳」の記録方法の解説のために前掲の如きそれらの記帳例を与えている⁽²¹⁾（80頁以下参照）。これら帳簿の記入の例示に先立ちサヴァリーは、各帳簿に係り以下の如く述べる。先ず、「抄録・理由帳」についてその名称の由来に係り「抄録帳 (livre extrait) は理由帳 (livre de raison) とも呼ばれている。なんとすればそれは、自らの為した総ての取引について、また、この帳簿と関連している他の諸帳簿に記載されている総ての取引について説明し、それ自体に於いて理由を明らかにしているからであり、他の諸帳簿に記載されていないことは、この帳簿に於いても何等記載されぬからである。」⁽²²⁾と、またこの帳簿の形式に係り「抄録・理由帳は借方と貸方とを以て付けられるべきであり、……その借方の側には『某氏は与うべし』という文言が、貸方であるところのそれに対するもう一方の側には『某氏は持つ』という文言が置かれる。」⁽²³⁾と述べている。次に「現金帳」についてその内容を「商人が受取る総ての金銭を、また彼らが支払う総ての金銭、家事費用に至るまでをそこに記載すべきである。」⁽²⁴⁾と、またその形式を「現金帳は借方と貸方とを以て付けられるべきである」⁽²⁵⁾と解説している。

また、この二つの帳簿の記録方法については、サヴァリーの「抄録・理由帳」の記録方法に係る次の指摘が参考となる。即ち「如何なる事柄も、それが他のいずれかの帳簿に於いて前以て示されておらぬ限り、この抄録・理由帳に記されることはない。」⁽²⁶⁾かかる指摘の意味するところは、次の解説によって更に明らかとなる。即ち「日記帳に於い

て記録されている或る項目を抄録帳上にもたらしに際して、(日記帳上の)当該項目のわきに『抄録帳、番号(及び丁数)』の各語を記入することには注意を要する。このことは前掲の仕入日記帳および売上日記帳の両記帳例に於ける諸項目のわきにも示されていることである。⁽²⁷⁾つまり、「抄録・理由帳」及びこれに含まれる「現金帳」への記入は、日記帳上の記録をもたらしことを以て即ち所謂転記を以て為されるのである。しかも、彼の与えるそれら両帳簿の記帳例については「私は手本として先に与えた仕入・掛売上上の両日記帳の記帳例に含まれている総ての項目をそこに於いて引合に出している」⁽²⁸⁾と述べ、彼がその記帳を例示する諸帳簿の間に、転記先となる帳簿即ち所謂主要帳簿⁽²⁹⁾と転記元たる帳簿即ち所謂基礎帳簿⁽³⁰⁾との間の関係に相当する、具体的な記帳関係の存していることを彼は明示しているのである。

そこで我々は、主要帳簿と基礎帳簿とのかかる関係に着目して、主要帳簿的性質をもつ「抄録・理由帳」および「現金帳」の実際の記録方法を検討し、それらの記録対象を明らかにすることをここに試みることにする。しかし当然のことながら、かかる点に着目したそれら帳簿に係るその検討にとって、それらの基礎帳簿にあたる帳簿である「仕入及び支払日記帳」、「掛売上及び金銭受取日記帳」の記録内容の検討もまた不可欠である。従って以下に於いては、この二つの日記帳をも拘わらせて、「抄録・理由帳」、「現金帳」の記録方法を検討することが必要となる。そこでこの検討にとって必要な、サヴァリーの与えるそれらの記帳例(前掲)の邦訳を、但し必要なる部分のみを以下に示し⁽³¹⁾(次頁以下参照)、この記帳例に従って、日記帳上の記録が「抄録・理由帳」および「現金帳」に如何に転記されているかを明らかにすることとする。

「仕入及び支払日記帳」(以下に於いて仕入支払日記帳とも記す)上に於いて記録されている諸取引のうち、丁数一・二・五・九に記録のある取引はいずれも、掛・手形による商品仕入取引であることがその記録の文言から判るが、かかる取引記録の一例として丁数一の七月一日付の記録を挙げ得る。この記録によれば、総額一一三リーブルの商品が

1673年

1673年7月1日に開始された仕入及び支払の日記帳

神の名に於いて、仕入及び支払に係る当帳簿は始められる。

1673年7月1日 1

ピエール・アルノー氏より、3ヶ月後に支払うものとして、彼が私に
売り渡した以下の商品を、

抄録1番丁数1	毳付白色綿入麻織物	1p	} 単価 16. リーブル	L 32.
	同上	1p		
200.	リュード産褐色綿毛交織物, 30オーヌ	} 54オーヌ	} 単価 30. s.	L 81.
202.	同上			
				L 113.

⋮

1673年8月6日 3

抄録1番丁数1	ニコラ・ブーコー氏より、現金にて彼が私に売り渡した以下の商品を、			
	2反のリヨン産二枚重綾織綿布, 1反につき 18.l. にて			L 36.
	2反の2級品, 1反につき 17.l. にて			L 34.
	2反の3級品, 1反につき 16.l. にて			L 48.
				L 118.

抄録1番丁数1 商品を私に引渡してくれた故、商品に対する代価として 118. l. をブーコー氏に同日支払った。

⋮

1673年10月15日 6

抄録1番丁数1 支払, ピエール・アルノー氏へ 13. l., 以前彼が私に売り渡した商品について、私が彼に支払うべきものの内金として、すなわち, L 63.

同20日 7

抄録1番丁数1 支払, ピエール・アルノー氏へ 50. l. 本日までに私が彼に支払うべきものの残について、すなわち L 50.

1673年12月8日 10

(抄録1番丁数1) ニコラ・オーブレ氏より、本日彼が私に貸付けた 300. l. を、同金額について、本日私は彼と私の約束を為す。すなわち、某公証人立会の下に一年後私の債務契約を結んだ、すなわち L 300.

1673年	
1673年7月1日に開始された、金銭受取及び掛売上日記帳	
神の名に於いて、金銭受取及び掛売上に係る当日記帳は始められる	
	1673年7月1日 <u>1</u>
抄録1番丁数2	払うべし、勘定主ベルトー氏は、本人に引渡し、以下の価格を、 10オースの、衣服・外套仕立用リュード産綿毛交織物， 1オースにつき 35.s. にて L 17.10.s. 4オースの、股引胴衣合用灰色綿織物， 1オースにつき 30.s. にて L 6. <u>L 23.10.s.</u>
	1673年7月7日 <u>2</u>
抄録1番丁数2	払うべし、仕立屋主人ピュール・コンタン氏は以下の価格を， 8オースのリヨン産、二枚重綾織綿布、単価 40.s. L 16. 6オースの白色綿入麻織物、単価 20.s. L 6. 12オースの黒色飾紐、単価 3.s. L 1.16. 8オンスの縫製用黒絹糸、1オンスあたり 20.s. にて L 8. <u>L 31.16.</u> 上記金額について本日彼は3ヶ月後払いの約束を為した。
	⋮
	1673年9月8日 <u>6</u>
(抄録1番丁数2)	払うべし、パリの商人ジャック・ベルナール氏は、本日彼に対して貸付 けた千リーブルを、同金額について、パリのシャトレに於いて公証人 立会の下一年後払いの債務契約を私と結ぶ、すなわち L 1000.
	⋮
	同(10月)28日 <u>8</u>
抄録1番丁数3	払うべし、ベルトー氏は、本日付請求書に従いシャンパーニュの従僕に 引渡し， 8オースの、同氏の衣服・外套仕立用シャロン織毛足の短い布， オースあたり 3.l.10.s. にて L 28. 4オースの合用白色綿織物、単価 30.s. L 6. <u>L 34.</u>
	⋮
	同(11月)15日 <u>12</u>
抄録1番丁数2	受取、仕立屋ピュール・コンタンによって私にもたらされたところのリ ヨン市のフランソワ宛の為替状に対する 31 liv. 16 sols. を、同フランソ ワより。私の指図によりその取立を依頼していたピック氏の手を経て私 はそれを受取った、すなわち <u>L 31.6.</u>

第 1 番
1673 年
私の、抄録・理由帳
パリの商人ジャック・ピカール
J. P.

(丁数 1)

1673	ピエール・アルノー氏は与うべし	1673	同アルノー氏持つ
10月15日	日記帳に於ける内金として現金支払、	7月1日	L. 113. 仕入日記に明らかな如く、3ヶ月後
同20日	日記帳に明らかな如く、精算のための現金支払、		払いの商品について、
	丁数 7. L. 70.	12月4日	仕入日記帳に明らかな如く、3ヶ月後払いの商品
	L. 113.		について、
1673		1673	
1673		1673	
8月6日	仕入日記帳に明らかな如く、反対側分について	8月6日	L. 118. 仕入日記帳に明らかな如く、現金払いの商品について
	現金支払、		丁数 3 L. 118.
	丁数 4. L. 118.		
1673		1673	
1673		1673	
	ニコラ・オーゾレは与うべし		同オーゾレ持つ
		12月8日	L. 300. 仕入日記帳に明らかな如く、1年後私の本日付の秋の
			約束により、
			丁数 10 L. 300.
1673		1673	

1673

勘定主ベルトー氏は与うべし

7月1日 売上日記帳に明らかな如く商品について、 丁数 1. L 23. 10.

8月1日 L 41. 売上日記帳に明らかな如く商品について、 丁数 4. L 41.

L 64. 10.

10月10日 売上日記帳に明らかな如く、ベルトー氏の小作人ジャック・トクシェへの L 64. 10. の譲渡を、本日同氏が私に対して為す、 丁数 7.

1673

仕立屋、ピエール・コンタソ、与うべし

7月7日 売上日記帳に明らかな如く、三ヶ月後私の予約による商品について、 丁数 2. L 31. 16.

10月30日 売上日記帳に明らかな如く、同コンタソがリヨンのフランソワ宛の 31. L 16. s. の書状を私に提供す、 丁数 10.

11月4日 L 18. 売上日記帳に現われた商品について、 丁数 11. L 18.

1673

国王の秘書官デュルソー氏、与うべし

8月31日 L 38. 10s. 商品について、売上日記帳に明らかな如く、 丁数 (3) 38. 10.

1673

パリの商人ジャック・ベルナール氏、与うべし

9月8日 L 1000. 売上日記帳に明らかな如く、一年後払いの本日付債務契約により同氏に貸付け、 丁数 6. L 1000.

1673

ベルトー氏、与うべし

(10月28日) 前記丁数2のほかに

L 34. 売上日記帳に明らかな如く、商品について、 丁数 8. L 34.

1673

1673

同ベルト氏持つ

10月29日 売上日記帳に明らかな如く、ベルトー氏の小作人ジャック・トクシェより現金受取、 丁数 9 L 64. 10.

以下丁数3へ記入

1673

同コンタソ持つ

11月15日 売上日記帳に明らかな如く、同コンタソにより私にもたらされた手形に従って、リオンのフランソワ氏より現金受取、 丁数 12. L 31. 16.

1673

同デュルソー氏持つ

9月4日 L 36. 現金受取、売上日記帳に明らかな如く、 丁数 5. L 36. L 2. 10. 商品について私が彼に割引いた、 丁数 38. L 2. 10.

1673

同ベルナル氏持つ

(丁数3)

1673

同ベルトー氏持つ

1673

現 金 帳

1673年7月1日開始

1673年	現金与うべし	1
7月1日	私の元入資本	L 6000.
9月4日	デェルソー氏より	L 36.
(10月29日	トクジエ氏より	L 64. 10sols.)
11月4日	ピカール氏より現金	L 31. 16sols.
(15)	(フランドソフ)	
12月8日	ニコラ・オーズレ氏より	L 300.
		<u>L 6367. 16.sols.</u>
	現金与うべし	2
	4206. liv. 6 sols. 丁数1に於ける貸方の、また当新勘定口座に於ける借方の勘定残高として、すなわち	<u>L 4206. 6sols.</u>

1673年	現金持つべし
8月6日	ノーコー氏へ支払
同 20日	ジャック・アルマソへ支払
(9月8日	ジャック・ベルナルへ
10月15日	ピカール・アルノー氏へ支払
同 20日	同氏へ支払
12月2日	フランドソフ・バシルへ支払
同 31日	先の7月1日より1673年12月31日までの私の家事費用のための支払
	4206. liv. 6sols. 丁数2の新勘定口座の借方にもたらされる残高として、すなわち
	<u>L 4206. 6. sols.</u>
	<u>L 6367. 16. sols.</u>

現金持つべし

2

ピエール・アルノー氏より、その代金を三ヶ月後に支払うものとして仕入れられていることが判るが、この記録の左端部分に於ける「抄録一番丁数一 (E. N. 1. f. 1)」なる符丁から、この記録に係り「抄録・理由帳」(以下に於いて単に抄録帳と記す)の第一番丁数一に転記の為されていることが更に判る。そこで、抄録帳のかかる部分の記録をみるならば、その紙葉の向って右側、サヴァリーいうところの貸方の側「同アルノー氏持つ」と標記された部分に、この記録に係る金額が七月一日付を以て存在していること、しかも当該金額の左脇に転記の元となった日記帳の丁数を示す「丁数一 (f. 1)」なる文言の記されていることを知る(詳細は前掲邦訳該当部分参看のこと)。(32)

右の、アルノー氏との七月一日付取引に関連するそれ以後の取引の記録は、同日記帳上、丁数六および七に於いて見出し得る。即ち、丁数六の十月十五日付の取引記録は、先の七月一日付取引に係る掛代金の、一部現金決済を、丁数七の同月二十日付の記録は、さらにその残の現金決済を示している。そこで、かかる両記録の左端の部分に存する所謂転記先を表す符丁が共に「抄録一番丁数一」を示していることを手掛りとして、抄録帳に於ける当該部分を看るならば、その紙葉の向かって左側、サヴァリー曰く借方の側「ピエール・アルノー氏は与うべし」と標記された部分に当の両金額がその日付順に転記されていることが判る。また、かかる両取引に於いて現金の支払の為されていることに着目し、それらの日付とそこに言及されているアルノー氏なる人名を手掛りとして「現金帳」(以下に於いて単に現金帳と記す)の記録を看るならば、その紙葉の向って右側、「現金持つべし」と標記された貸方の側の部分にそれら金額の存することを知る。同種の記録は当該日記帳の丁数四および八に於いて、またそこから転記の為される抄録帳および現金帳に於いて見ることを得る。

かかる抄録帳に於けるアルノー氏に係る部分——通常の簿記用語を以て敢えて謂うならば——アルノー氏勘定口座の左右両方の側に為された各記入から、所謂アルノー氏勘定口座に於ける記録対象が明らかとなる。即ち、その右側

部分には同氏からの商品仕入に係り発生した債務すなわち仕入債務の金額が、またその左側部分にはかかる仕入債務に対して支払われた現金の金額すなわち同氏に係り消滅した仕入債務の金額が「仕入支払日記帳」を通じて記録されているのである。このことは、このアルノー氏に係る記録と同種類の他の記録についても同様に妥当する。とするならば総じて、次の如くなる。即ち、仕入支払日記帳の記録に於いて、発生あるいは消滅した仕入債務の金額は、抄録帳一番丁数一に於いて開設されている当該仕入先の人名勘定口座の右側部分あるいは左側部分に転記される。とすればここに、かかる人名勘定口座の記録対象を、その右側部分に就いては、その人名の示す人物に係り発生した仕入債務の金額であり、その左側部分に就いては、右側部分の記録に対して消滅した仕入債務の金額であると規定し得ることとなる。

次に、同日記帳上に於いて見るべきは、丁数三に示されている八月六日付の取引記録である。この記録は、現金による商品の仕入取引をその内容としており、従って当然、現金帳に於ける紙葉の支払の側即ち右側にその支払われた金額の記録を見ることを得る。しかしながら、同日記帳に於ける記録の左端部分の、転記先を指示する二つの同じ符丁は、この記録に係り抄録帳一番丁数一のいずれか二箇所に転記の為されていることを示している。そこで、この記録に言及されているニコラ・ブーコー氏なる人名を手掛りとして抄録帳の記録を見るならば、所謂ニコラ・ブーコー氏勘定口座に相当する部分の左右両方の側に同じ日付を以てその記録の存することを知るに到る。前段の検討結果に基づくならば、ここに存する両記録が、その右側部分に於いて仕入債務の発生を、また左側部分に於いてその消滅を、それぞれの金額を以て表わしていることになる。とすれば、かかる現金仕入取引は、記録上、掛による仕入取引（仕入債務の発生）とその掛に対する現金支払取引（同債務の消滅）との両取引が同じ日付を以て為された如くに擬制されていることとなる。かかる解釈は、同取引の日記帳上の記録を、改めて見るにより更に完全なものとなる。即ち

そこにはかかる一つの取引が一つの丁数を以て、あたかも二つの取引が為されたかの如くに二つに分けて記録されているのである（前掲邦訳該当部分参照）。

「仕入支払日記帳」に係り、検討すべき残る記録は、その丁数を一〇と付された二月八日付の取引記録である。この記録の文言からここに記されている取引が現金の借入取引なることがわかる。この取引に於いて現金の受取られていることは明らかであり、故に、この受取られた現金に係る記録が同日記帳から現金帳に写されているであろうことは容易に推察し得る。そこで現金帳の紙葉を見るならば、果してそこにはこの取引に係る現金の金額が、「現金与うべし」と標記された左側部分に、当該日付と共に存していることを知る。ところが、当該日記帳のこの記録に於いては、これ以外の総ての記録に於いて見ることもできる。抄録帳への転記を示す符丁の記載が無い。故に、一見したところでは、この記録に係り抄録帳へは何等転記されていないと考え得る。しかしながら、この記録に言及されているニコラ・オーブレなる氏名とその日付とを手掛りとして、抄録帳の全紙葉に於ける記録を漏れ無く観察するならば、その最初の紙葉に於いて当該人物の氏名とそれに係る部分とを、そしてその右側に於いて当該日付さらにはその取引に係る金額を見出すことを得る。しかも、その金額に附して転記の元を示す丁数の一〇なること、転記元の帳簿が当該日記帳である旨の摘要の存することを見出し得る。とすれば、当該日記帳の当該記録に於ける符丁の記載不備は単なる誤りに過ぎず、そこには「抄録一番丁数一」なる符丁の当然記されるべきこととなる（かかる検討に基づき、邦訳にあたりその部分に括弧を付した）。

かくて右に於ける検討から、現金借入取引に係り、仕入支払日記帳から抄録帳一番丁数一に於ける借入先の人名勘口座の右側部分に借入れた現金の金額が、また現金帳に於ける紙葉の受取の側すなわち左側部分に受取った現金の金額が転記されていることが明らかとなる。ここで、前述の掛仕入取引に於ける抄録帳当該人名勘定口座の記録対象が

仕入に係り発生した債務の金額であったことを想起するならば、抄録帳上の借入先の人名勘定口座（具体的にはニコラ・オーブレと標記された部分）の右側部分に為された記録について、その記録対象を、同氏からの現金の借入に係り発生した債務の金額すなわち借入債務の金額であると類推することを得る。とするならば、その左側部分に為されるであろうところの記録については、その右側部分に於いて記録されている借入債務の金額を同氏に対して返済した際の記録と推察し得、従ってその記録対象を借入債務の既返済額すなわち消滅した借入債務の金額であると推定し得ることとなる。以上要するに、抄録帳に於ける当該人名勘定口座はその右側部分に於いて、発生した借入債務の金額を、その左側部分に於いて、消滅した当該債務の金額を記録しているということである。

以上の検討から、仕入支払日記帳は、商品の掛（現金）仕入取引・商品仕入代金（掛代金）の支払取引および現金の借入取引・借入の現金返済取引に係る事柄を記録し、これら各々の記録に基づきそこから、それら各取引に係り、発生した仕入・借入債務の金額が抄録帳一番丁数一に於ける当該各人名勘定口座の右側部分に転記され、またその右側部分に為されている記録に対して消滅した同債務の金額が同人名勘定口座の左側部分に転記されていることが明らかとなった。そして、この検討結果に基づき、抄録帳第一番丁数一に於いて開設されている各人名勘定口座の右側・左側それぞれの部分に於ける記録対象の、発生・消滅した仕入および借入債務の金額なることが明らかとなるが、同帳簿の丁数二以下に於ける部分に係るその記録対象についての検討は未だ済んでいない。また、かかる日記帳に於ける同記録に基づきここから、商品の仕入代金支払取引・借入れた現金の返済取引に係り支払われた現金の金額が現金帳に於ける紙葉の右側部分に、現金の借入に伴い受取られた現金の金額がその左側部分に転記されているということも、前段までの検討に於いて明らかとなっているが、かかる現金帳の記録対象の解明のためには、その記録方法に就いての更なる検討を要すると思われる。なんとすれば、この現金帳の記帳例示には、仕入支払日記帳からの転記に基づく

記録のみならず、それ以外の記録もまた含まれているからである。かかる記録についてもその記録方法の検討を為すべきことは言を俟たない。かくて次に、「掛売上及び金銭受取日記帳」の記帳例に従い、それに関わる諸帳簿の記録方法の検討を為すべきこととなる。

そこで、「掛売上及び金銭受取日記帳」（以下に於いて売上受取日記帳とも記す）の記帳例に於ける記録内容を通観するならば、そこに記録されている取引の内容の、前掲「仕入及び支払日記帳」のそれと比して、やや複雑なることを知る。すなわちその一例を掻い摘み示せば、仕入支払日記帳に於いては現金を以て掛代金の支払を為すというような単純な取引の事例が用いられていたのに対し、売上受取日記帳に於いては、掛代金の回収を、所謂為替手形に相当する為替状なるものを以て為す事例の採用されている如きである。かかるその取引内容の複雑性は、これまでの我々の、諸帳簿の記録方法の検討にあたり仕入支払日記帳に記録されている取引の種類に着目するという観点の、以下に於ける若干の変更を余儀無くする。なんとなれば、以下の検討に於いてかかる観点を以てしては、その記述が煩雑となると思えるからである。そこで以下に於いては、抄録帳一番丁数二以下の紙葉に於いて開設されている各勘定口座の人名に着目して、当該人名に係る取引の記録を売上受取日記帳に於いて見出し、その記録について諸帳簿の記録方法を検討していくこととする。

先ず検討すべきは、抄録帳一番丁数二の紙葉に於いて最初にその氏名を見出し得る、ベルトー氏なる人物に係る取引の記録である。かかる記録は、売上受取日記帳上、丁数一・四・七・八・九に於いて見出すことを得る。丁数一および四に於ける七月一日付並びに八月一日付の記録はいずれも同氏への掛による商品の販売取引を示していることが、その記録の文言より判るが、この両記録それぞれの左端余白部分には、仕入支払日記帳上のそれにも見得る如く、抄録帳への当該記録に係る転記を示す符丁を見ることを得る。但し、仕入支払日記帳上のそれが抄録帳一番丁数一を示

していたのに対し、ここに於けるその符丁はいずれも「抄録一番丁数二(E. N. 1. f. 2.)」すなわち同帳簿同番号ながらもその丁数を「二」としている。つまり、この符丁の意味するところは、両記録に係り、抄録帳一番丁数二に於けるベルトー氏勘定口座への転記が当該日記帳より為されているということである。そこで、抄録帳の当該部分に於ける記録を見るならば、その左側「勘定主ベルトー氏は与うべし」と標記された部分に、日付順に、両記録に係る金額が、転記の元である売上受取日記帳の丁数と共に存していることを知る。因に、その両金額はそれぞれ二三リーブル一〇スーと四一リーブルとである(前掲邦訳該当部分参看のこと)。

右の、売上受取日記帳丁数一・四に於いて記録されている取引に関連して同日記帳丁数七に於いては次なる記録が存している。即ち一六七三年一〇月一〇日付を以て「ベルトー氏は、過去の一切の時から本日までの間に彼が支払うべきものの返済猶予のために、ラニーの彼の土地の小作人ジャック・トクシェから取立て受取るべく、六四リーブル一〇スーの金額に係る、保証付の譲渡を私のために為した」という文言と当該金額がそこに記されている。かかる文言より、前述の掛売代金の合計に係るベルトー氏の支払義務が、彼の小作人トクシェなる人物に譲渡されたことが判る。更に、この記録には符丁が附記されており、これによって、抄録帳一番に於ける丁数二に、その記録に係る転記の為されていることが判る。そこでこの符丁の示すところに従って、抄録帳の当該部分を見るならば、ベルトー氏勘定口座の左側部分に、同日記帳上の当該取引記録の摘要が同日付を以て記されていることが判るが、そこには、転記の元の日記帳丁数がその摘要と共に記されているものの、当該取引に係る金額は摘要のうちには見出し得るものの通常の他の記録の如く独立しては記されていない(前掲抄録帳邦訳参照)。

次に検討すべきベルトー氏に係る取引の記録は、売上受取日記帳上、丁数八および九に於いて見出し得るところの二つの記録である。一〇月二八日付の丁数八に於ける記録は、そこに記されている文言より、同氏に対する商品の掛

販売取引であり、そこに記されている符丁より、この取引記録に係る転記の抄録帳一番丁数三に為されていることが判る。ここに注意すべきは、転記先の抄録帳の丁数が三となっていることである。そこで抄録帳の当該部分を見るならば、そこには、丁数二に於けると同様のベルトー氏に就いての勘定口座の更にもう一つ開設されていること、しかもその左側「ベルトー氏は与うべし」と標記された部分にこの取引に係る記録すなわち同日記帳の取引記録の摘要、転記元の日記帳丁数および金額の記されていることを知る（日付の記入不備は単なる誤りか）。

また、同日記帳上、丁数九の一〇月二九日付の記録は、先にベルトー氏から同氏の掛代金六四リーブル一〇スーの支払義務の譲渡を受けたトクシェ氏による当該金額の現金の支払に係る取引の記録であり、そこに記されている符丁の示す通り、抄録帳一番丁数二にこの記録に係る転記が為されている。即ち、抄録帳当該部分の右側「同ベルトー氏持つ」と標記された部分に、かかる記録の日付・摘要・転記元丁数・金額が写されている。また、この記録の内容とする取引は、トクシェ氏からの現金の受取であり、従って、ここに受取られた現金の金額は、同日記帳から現金帳へと転記されている筈であると考え得る。そこで、現金帳の記録を見るならば、その紙葉の左右いずれの側にも、かかる記録の存していないことを知る。しかしながら、以下に於いて検討する同種の他の記録（例えば売上受取日記帳丁数一二に於ける記録）に依れば、この取引に係り受取られた現金の金額は当然、現金帳の紙葉の左側部分に同日記帳を通じて転記されねばならぬことが判る。とすれば、ここに記録の無いことは、単に記録の脱漏に過ぎず、これに係る固有の記録方法が存しているとは考える必要の無きこととなる（かくして前掲現金帳の邦訳にあたり当該部分に括弧を付しそれを補完することになった）。

抄録帳に於いて見出し得るベルトー氏なる人名に係る取引に就いて、諸帳簿に為された記録は以上の通りであるが、ここでこれらに係る諸帳簿の記録方法を次の如く要約し得る。即ち、ベルトー氏に商品を掛にて販売した場合、先ず

売上受取日記帳にこの取引の日付、取引内容を示す文言および金額が記録され、そこから抄録帳一番丁数二に於けるベルトー氏勘定口座の左側部分に、当該金額が同日付を以て転記される。その際、同日記帳上の記録には転記先を示す符丁が、また抄録帳上の当該部分に転記された金額には転記元を示す同日記帳丁数が附記される。そして、かかる掛代金の支払義務がベルトー氏からトクシェ氏へと移転した場合、同日記帳を経て抄録帳に於けるベルトー氏勘定口座の左側部分に、その旨の摘要が日付および転記元丁数と共に記される。但しここには金額の独立した記入は無い。次に再びベルトー氏に商品を掛販売した場合、その記録は同日記帳を経て、抄録帳一番丁数三に於けるもう一つのベルトー氏勘定口座の左側部分に転記される。更に、トクシェ氏から前記掛代金を受取った場合には、同日記帳を経て、抄録帳一番丁数二のベルトー氏勘定口座の右側部分にその金額が記録され、同時に現金帳の紙葉の左側部分にもそれが記録される。

以上の要約から、掛代金の支払義務移転に係る、抄録帳上の人名勘定口座の記録方法を次の如く解明し得ることとなる。即ち、ベルトー氏勘定口座の左側部分に記された金額は、同氏に対する未回収の掛代金の金額を示し、これがトクシェ氏に譲渡された場合には、そこに記された金額が場所を移すことなくそのままトクシェ氏に対する債権の金額となるのである。換言すれば、ベルトー氏からトクシェ氏への債務移転の時点に於いて、ベルトー氏勘定口座は、それ自体、トクシェ氏勘定口座に変質するのである（但し勘定口座名にあたる氏名の書替えは為されない）。従って、その後ベルトー氏に係る取引が新たに生じた場合には、同氏のための勘定口座を今までとは別の場所に新たに開設し、この新設の勘定口座に転記することを要することとなる。また、トクシェ氏による代金清算の取引が生じた場合には、既存の、ベルトー氏なる名称を付されてはいるが実質的にはトクシェ氏のためのものであるベルトー氏勘定口座の左側部分に転記が為されることとなる。支払義務の移転に係る斯くの如き抄録帳の記録方法には、更にもう一つ別の方法

が例示されている。すなわちそれは、抄録帳第一番丁数二の紙葉に於いて、ベルトー氏に次いでその氏名を見出し得る、ピエール・コンタンなる人物との取引に係る、以下に解明することとなる記録方法である。

このピエール・コンタンなる人物に係る取引の記録は、売上受取日記帳上、丁数二・一〇・一一・一二に於いて見出すことを得る。このうち、同日記帳丁数二に於ける記録は、一六七三年七月七日付の、ピエール・コンタンへの掛による商品販売をその内容とし、そこに附記されている符丁 (E. N. 1. f. 2.) に従って、抄録帳一番丁数二に於ける、同氏のための勘定口座の左側「仕立屋、ピエール・コンタン、与うべし」と標記された部分に、当該取引の金額三一リーブル一六スーが、その左脇に日記帳丁数を伴い記されている。このことから、かかる金額の、売上受取日記帳から抄録帳へと転記されたことが分明となる。この日記帳のかかる記録に関連する取引として、同日記帳丁数一〇に於いて次なる記録を見出し得る。即ち、同日記帳丁数一〇に記された文言は、同年同月（一六七三年一〇月）三〇日付を以て「受取、衣服仕立屋ピエール・コンタンより。パリのギョーム振出リヨン市商人フランソワ宛、同コンタンに或いは同氏の指図により、一覽後八日払いを以て支払うべき、三一リーブル一六スーの金額の為替状を。本日までコンタンが私に支払うべき金額の返済猶予のために、その裏書に於いて、彼は私の受取を指図している」とある。この記録の内容から、コンタンに対する予て（七月七日）からの掛売代金が、同氏の裏書のある為替状 (une lettre de change) をもって回収されたことが判る。そして、当該日記帳のかかる文言の左脇に附されている符丁に基づき、抄録帳一番丁数二、ピエール・コンタン氏勘定口座を看るならば、その左側部分に、一〇月三〇日付を以て「売上日記帳に明らかな如く、同コンタンがリヨンのフランソワ宛三一リーブル一六スーの書状を私に提供す」という摘要の存すること、更には、転記の元を示す当該日記帳の丁数がそれと共に記されていること、しかし、通常の他の記録の如き金額の独立した記載の無きことを知る（前掲抄録帳邦訳該当部分参照）。

次に見るべきコンタン氏に係る取引の記録は、売上受取日記帳丁数一一・一二に於いて見出し得る二つの記録である。先ず、丁数一一の十一月四日付の取引記録は、そこに記されている文言より、同氏に対する商品掛販売取引の記録であり、この文言の左脇に附記されている符丁より、この記録に係り抄録帳一番丁数二に転記の為されていることが判る。そこで抄録帳の当該部分を見るならば、前述のピエール・コンタン氏勘定口座の左側部分に、当該日付を以て、転記元の日記帳丁数を附した、当該取引金額の記されていることを知る。次に、同日記帳丁数一二の十一月五日付の記録は、そこに記されている文言（前掲邦訳該当部分参照）より、先日（一〇月三〇日）コンタン氏から裏書譲渡された為替状について、その所謂名宛人であるフランソワより、それに係る金額三一リブル一六スーを受取ったという取引の記録であることが判る。また、その文言に附されている符丁は、この取引記録に係り抄録帳一番丁数二にも更に記録の為されていることを明示している。そこで、抄録帳の当該部分を見るならば、ピエール・コンタン氏勘定口座の右側「同コンタン氏持つ」と標記された部分に、同日付を以て、日記帳の文言の要約である摘要と、その日記帳丁数を附した金額（三一リブル一六スー）とが記されていることを知る。更に、この日記帳に記されている取引の内容がフランソワなる人物からの現金の受取であることから、ここに受取られた現金の金額（三一リブル一六スー）は、同日記帳から現金帳へと転記されいる筈であると推察し得る。そこで、この現金の金額を手掛りとして、現金帳の記録を見るならば、その紙葉の左側「現金与うべし」と標記された部分に存する複数の記録のうちのひとつとして、当該金額に係る記録を見出し得る（前掲邦訳該当部分を参照されたし。但し、そこに於けるこの金額に係る日付および摘要の記載の誤りは単なる誤記であるとの判断のもとに、その部分の下には括弧を附した訂正の記入を施してある）。

抄録帳に於いて見出し得るピエール・コンタンなる人物との取引に係り、諸帳簿に為された記録は、前段までに観察してきた四種類の記録を以てその総てとする。かくて、これらに係る諸帳簿の記録方法を次の如く要約し得ること

となる。即ち、同氏に対して商品の掛販売を行った場合の諸帳簿（この場合には売上受取日記帳および抄録帳）の記録方法は、先に見たベルトー氏への商品掛販売取引に係る諸帳簿の記録方法と異なる所は何等無い。つまり、売上受取日記帳に、かかる取引が記録され、この記録に基づき、抄録帳一番丁数二に於いて開設されているビエール・コンタンのための勘定口座の左側部分に転記が為されるのである。また、この掛代金の決済が同コンタンの裏書譲渡による為替状を以て為された場合、従ってその代金の支払義務がこの為替状の名宛人であるところのフランソワなる人物に移転した場合にも、先に見たベルトー氏に係る掛代金支払義務移転の場合と同様に、売上受取日記帳の記録を経て、抄録帳ビエール・コンタン勘定口座の左側部分に、日付・摘要・転記元日記帳丁数が、当該取引金額の独立した記載無しに、記される。ここまでの諸帳簿の記録方法は、先に検討したベルトー氏との同種の取引に係るそれらの記録方法と全く一致している。

ところが、次に再びコンタン氏に商品を掛販売する場合に於いては、ベルトー氏との同種取引に係る諸帳簿の記録方法と比較を為すに、売上受取日記帳のそれらに就いては相違する所何等無くも、抄録帳の記録方法に就いて異同が生じてくる。即ち、かかる取引が発生した場合、それに係る記録は同日記帳を経て、抄録帳一番丁数二に於けるビエール・コンタン勘定口座の左側部分に転記される。既に見た如く、ベルトー氏との間に生じた同種取引すなわち掛代金支払義務移転後の同氏との新たな取引に係り、その記録を同日記帳から転記するにあたっては、同氏のための新たな勘定口座が既存の勘定口座とは場所を変えて開設されており、この新勘定口座の左側部分にこの記録が転記されていた。しかしここでは、コンタンのために新たな勘定口座は開設されず、同抄録帳の丁数二に於ける既存のコンタン勘定口座が転記先として利用されているのである。そして、先にコンタンの為した為替状裏書によって支払義務を負うこととなったフランソワからの支払が為され、その代金を現金にて受取った場合には、同日記帳を転記元と

し、抄録帳一番丁数二に於いてのみ開設されているコンタン勘定口座の右側部分を転記先として、この取引に係る金額が写される。またこれと同時に、現金帳の紙葉の左側部分にも転記先としての記録が為される。

右の要約から、為替状の裏書譲渡に係る、抄録帳上の人名勘定口座の記録方法を次の如く総括し得ることとなる。即ち、コンタン勘定口座の左側部分に記録された金額は、同氏に対する未回収の掛代金の金額を示し、これを同氏の裏書のある為替状を以て回収した場合には、そこに記されている金額が場所を移すことなくそのまま、為替状の裏書に於いてその支払を指図されたところの名宛人フランソワに対する債権の金額となるのである。つまり、掛代金としての為替状の受取時点に於いて、コンタン氏勘定口座は、コンタンのための勘定口座であるのみならず、フランソワのための勘定口座でもまたあるという質的な変化を起こすのである（但し所謂勘定口座名にあたる人名の書き加えは為されない）。即ち、この時点に於いて、一つの勘定口座を以てコンタン勘定口座とフランソワ勘定口座の異なる二つの勘定口座を表現することとなるのである。従つてその後、この両者に係る取引がそれぞれ生じた場合には、そのいずれの取引に就いても、コンタン勘定口座にそれに係る記録の為されることとなるのである。

抄録帳に於いて見出し得るベルトーおよびピエール・コンタンなる人名を手掛りとした、諸帳簿の記録方法に関する以上の検討から、抄録帳一番丁数二・三に開設されているベルトー氏勘定口座、同丁数二に開設されているピエール・コンタン勘定口座の記録対象が明らかとなる。即ち、両勘定口座の左側部分は、ベルトー、コンタンの両氏それぞれへの商品の掛売上に係り発生した債権の金額、および、ベルトー氏の為した掛代金支払義務の譲渡によつて同氏に代わりその義務を負うこととなったトクシェ氏に対する債権の金額、あるいは、コンタン氏の為した為替状の裏書によつて同氏に代わり掛代金の支払義務を負うこととなったフランソワ氏に対する債権の金額を、売上受取日記帳からの転記を以て記録している。また、両勘定口座の右側部分は、それぞれの左側部分の記録に対して、トクシェ氏ある

いはフランソワ氏から受取った現金の金額、換言すれば、両氏に係り消滅した債権の金額を、同日記帳からの転記を以て記録している。とすればここに、かかる人名勘定口座の記録対象を、その左側部分に就いては、商品の掛売上・債権の移転・為替状の受取にともない発生した債権すなわち所謂売上債権の金額であると、またその右側部分に就いては、左側部分の記録に対して消滅した売上債権の金額であると規定し得ることとなる。

抄録帳一番丁数二に於いて、次に見出し得る人名は、国王の秘書官デュルソーなる人名である。かかる人物との取引に就いての記録は、売上受取日記帳丁数三および五に於いて存在している。先ず、丁数三に於いて記されている文言は、一六七三年八月一日付を以て、デュルソー氏に商品の掛売上を為した旨の内容を示し、そこに附記して転記先を示す符丁の抄録帳一番丁数二なることから、この日記帳上の記録が抄録帳当該部分に写されていることを知る。かくて、抄録帳に於ける同氏のための勘定口座の左側部分に於いて、この取引に係り発生した債権の金額三八リール一〇スーの記録を見ることとなる。⁽³³⁾次に、同日記帳丁数五に於ける文言は、同年九月四日付を以て「受取、国王の秘書官デュルソー氏より三六リールを。本日までに同氏が支払うべき一切のものについて。領収書作成。」と記されている。つまり、同氏に対する全債権三六リールが現金をもってここに回収されたという内容の取引記録である。そして、この日記帳の文言に附記された符丁に従い、抄録帳一番丁数二のデュルソー氏勘定口座右側部分に当該金額の転記されていること、また日記帳文言の示す内容に従い、受取られた現金の金額が現金帳の紙葉の左側部分に転記されていることを、それぞれの帳簿を参看することにより確認し得る。

しかしながら、デュルソー氏に対する債権の金額は、先の八月一日付の記録から明らかな如く、商品の掛売上にともない生じた三八リール一〇スーである。それ以後九月四日に至るまで同氏との間にはこの日記帳の記録を見る限りに於いて何等の取引も記されていない。とすれば、この九月四日に現金にて回収された三六リールは、同氏に対

する予てからの債権の金額三八リーブルー〇スーのうちの大部分ではあるが全額ではないということとなる。にもかかわらず、ここに回収された三六リーブルーをもって同日記帳の文言の「同氏が支払うべき一切のもの」としている理由は何か。この理由は、この文言に附された符丁の示す転記先、抄録帳一番丁数二に於ける、デュルソー氏勘定口座の右側部分の記録を見れば明らかとなる。即ちそこには、九月四日の日付を以て現金三六リーブルーを受取った旨の摘要を伴い、転記元日記帳丁数を附した当該金額が記され、更にその下に、その時点に於いて曾て販売した商品に就いてその代金の一部である二リーブルー〇スーを割引いたという旨の摘要と、当該割引額が記されている（前掲邦訳該当部分参照）。

かくて右に於ける、デュルソー氏勘定口座右側部分の記録内容から、同日記帳丁数五に記された九月五日付の取引を次の如く解明し得る。即ち、この取引は、デュルソー氏に対する予てからの三八リーブルー〇スーの金額の債権に就いて、二リーブルー〇スーを割引き、差額の三六リーブルーを現金にて回収したという取引であったのである。かかる取引について、同日記帳に於いては受取った現金の金額にのみ言及が為され、この受取額をもって「デュルソー氏が支払うべき一切のもの」とすることにより、同氏に対する本来の債権の金額とこの受取額との差額分については割引を為したということを仄めかしているに過ぎないということである。而して、同日記帳のこの記録に基づき、抄録帳一番丁数二に於けるデュルソー氏勘定口座の右側部分に、受取った現金の金額および割引いた債権の金額がそれぞれ転記されているのである。とすればここに、デュルソー氏勘定口座の記録対象を解明し得ることとなる。即ち、同氏勘定口座の左側部分は、商品の掛売上にもない発生した債権の金額を、またその右側部分は、左側部分に記録されている債権に対して、現金の受取あるいは債権の割引をもって消滅した債権の金額をそれぞれ記録対象としているのである。

抄録帳の記録対象を解明するために、抄録帳に於けるその記録方法の検討の未だ済んでいない最後に残った勘定口座は、同帳簿一番丁数二に存している、パリの商人ジャック・ベルナールを主とした勘定口座である。この勘定口座に記入を為すべく前提となる記録は、売上受取日記帳の丁数六に於いて唯一見出すことを得る。そこに於ける一六七三年九月八日付の記録は、パリの商人ジャック・ベルナール氏へ千リーブルの現金を貸付けたという取引のあったことを示している（前掲邦訳該当部分参照）。そして当然、この記録に基づき抄録帳に転記が為され、その結果、同日記帳のこの記録の左脇欄外余白部分には転記先を示す符丁の記されているべきである。ところが、同日記帳に於いて、丁数六のこの記録についてのみ、かかる符丁の記載が無い。故に、一見したところでは、この記録に係り所謂転記漏れを犯している疑いが生じてくる。そこで、本来ならば当然転記先となる筈のジャック・ベルナール氏勘定口座を抄録帳一番丁数二に於いて見出し、そこに於ける記録を観察するならば、先の疑いの杞憂に過ぎなかったことが判る。即ち、その勘定口座の左側部分には、当該日付を以て、転記元の帳簿の売上受取日記帳なることの意を含む取引内容の摘要、転記元日記帳の丁数六を附した当該取引に係る金額千リーブルの記録が存在しているのである。とすればここに、売上受取日記帳丁数六に於ける転記先符丁の記載不備を単なる書き洩らしであると判断すべきこととなる。⁽³⁴⁾

右に検討した売上受取日記帳丁数六の記録は現金の貸付をその内容としている。従って、貸付にともない支払われた現金の金額は、同日記帳から現金帳へと転記されている筈であると推察し得る。そこで、この取引に係り支払われた現金の金額千リーブルと支払相手の人名ジャック・ベルナールおよびこの取引の日付九月八日とを手掛りとして、現金帳の全記録を観察するならば、その紙葉の左右いずれの部分にもかかる記録の存在していないことを知る。しかしながら、これまで検討してきた、現金の支払を内容とする取引に係る現金帳の記録方法に基づけば、この場合、現金帳に於いてかかる記録の見出し得ぬことは、単に記録の脱漏に過ぎないと考えねばならぬこととなる。かくて、こ

の現金貸付取引によって支払われた現金の金額は当然、現金帳の紙葉の右側部分に、売上受取日記帳を転記元として写されねばならぬこととなる（斯くして現金帳の前掲邦訳にあたり当該部分に括弧を附し、この記録の脱漏を補完することとなった）。

かくて前段までの、ジャック・ベルナルなる人名さらには同人物との取引内容を手掛りとした、諸帳簿に為された或いは為される筈の記録の観察から、現金貸付取引に係る諸帳簿の記録方法が明らかとなる。即ち、かかる取引が生じた場合は先ず最初に、売上受取日記帳に、その日付、取引の内容を示す文言、貸付けた（支払った）現金の金額をそれぞれ記録し、この日記帳の記録に基づき、抄録帳一番丁数二に於ける貸付相手の人名勘定口座の左側部分に貸付けた現金の金額を、また現金帳に於ける紙葉の右側部分に支払った金額をそれぞれ同時に転記するのである。とすれば、ここに明らかとなった記録方法を更なる手掛りとして、抄録帳に於いて開設されている当該人名勘定口座の記録対象を解明し得ることとなる。即ち、この勘定口座、具体的にはジャック・ベルナル氏勘定口座は、その左側部分に於いて、同氏への現金貸付にともない発生した債権の金額すなわち貸付債権の金額を記録対象としているのである。また、その右側部分に於いては、そこに為されるであろう記録の前提となる取引が未だ生じてはいないが、他の人名勘定口座の記録対象に就いての検討結果を手掛りとするならば、その左側部分に記された貸付債権の金額に対して、将来その返済を受けた場合に消滅するであろう貸付債権の金額を記録対象とすると推定し得ることとなる。

抄録帳一番丁数二以下に於いて開設されている各人名勘定口座の標記のうちに見ることを得る人名は、前段に於いて言及したジャック・ベルナルを以て最後とする。かくて、そこに見出し得る人名に着目した、各々の人物との取引に係る諸帳簿すなわち売上受取日記帳・抄録帳・現金帳の記録方法、延いてはその記録対象の個別的検討もまた前段を以て終了したことになる。とすれば此処に、かかる検討の結果を総括すべきこととなる。即ち、売上受取日記帳

には、商品の掛売上取引、掛代金の現金回収・為替状による回收取引、掛代金支払義務移転に係る取引、掛代金の割引に係る取引、および現金の貸付取引・貸付の現金回收取引に係る事柄を記録し、これら各々の記録に基づきそこから、それら各取引に係り、発生した売上債権・貸付債権の金額を抄録帳一番丁数二あるいは三に於ける当該各人名勘定口座の左側部分に転記し、またその左側部分に為されている記録に対して消滅した同債権の金額をその同じ勘定口座の右側部分に転記している。かくて、抄録一番丁数二および三に開設されている各人名勘定口座の左側・右側それぞれの部分に於ける記録対象の、発生・消滅した売上・貸付債権の金額なること、ここに分明となる。

更に、売上受取日記帳に於ける商品の掛売上代金の現金による回收、為替状の決済に係る現金の受取、および貸付に伴う現金の支払、貸付の回收に伴う現金の受取の各記録に就いては、それに基づきそこから、受取った現金の金額を現金帳に於ける紙葉の左側「現金与うべし」と標記した部分に、また支払った現金の金額をその右側「現金持つべし」と標記した部分にそれぞれ転記している。また、この現金帳に於ける各部分には、既に見た如く、仕入支払日記帳に於ける各記録からも転記が為されていた。即ち、(掛)仕入代金の支払・借入れた現金の返済に係り支払った現金の金額をその右側部分に、また現金の借入に伴い受取った現金の金額をその左側部分に仕入支払日記帳からの転記に基づき記録していた。そこで、現金帳のかかる記録方法に着目するならば、この帳簿の記録対象は、その紙葉の左側部分に於いては受取った現金の金額であり、その右側部分に於いては支払った現金の金額であると規定し得ることとなる。

しかしながら、この現金帳にはその記録方法の検討の未だ済んでいない幾つかの記録が存在している。これらに就いては、これまでの、諸日記帳に既に記録されている取引あるいは抄録帳に記された人名を手掛りとした検討方法を以てしては、その検討の対象とは成り得なかったものである。つまり、一見したところそれらは、現金帳に於いての

み固有の存在であるのである。曾てサヴァリーは、この現金帳に就いて「これを特別なものとして備える必要はなく、同じ抄録帳に含まれる」⁽³⁵⁾と述べ、更にこの現金帳をそのうちに含む抄録帳に就いて「抄録帳は理由帳と呼ばれている。なんとすればそれは、自らの為した総ての取引について、また、この帳簿と関連している他の諸帳簿に記載されている総ての取引について説明し、それ自体に於いて理由を明らかにしているからであり、他の諸帳簿に記載されていないことは、この帳簿に於いても何等記載されぬからである」⁽³⁶⁾と、また「如何なる事柄も、それが他のいずれかの帳簿に於いて前以て示されておらぬ限り、この抄録・理由帳に於いて記されることはない」⁽³⁷⁾と述べた。サヴァリーのかかる指摘に依れば、前述の、現金帳にのみ固有の記録の存在は、決して許されるべきものではないということとなる。とすれば、サヴァリーの右の指摘とその実際の記帳例との異同は如何なる理由に依るのか。

右に述べた、現金帳に固有の記録は次の四つの記録である。即ち、その紙葉の左側部分丁数一に於ける七月一日付の六千リーブルの記録と同丁数二に於ける日付の記載の無い四二〇六リーブル六スーの記録、またその右側部分丁数一に於ける一二月三十一日付の一五〇〇リーブルの記録と日付の記載の無い四二〇六リーブル六スーの記録である。このうち、その丁数一の右側部分と丁数二の左側部分とに於ける共に日付の記載の無い、同一の金額の記録は、それぞれの金額に附記された文言すなわち右側に於いては「丁数二の新勘定口座の借方にもたらされる残高」また左側に於いては「丁数一に於ける貸方の、また当新勘定口座に於ける借方の勘定残高」なる文言から明らかな如く、帳簿内に於ける残高の繰越の記録であり、他の帳簿からこのそれぞれの部分への転記を必要としない記録である。とすれば、その記録方法を検討すべき、現金帳に固有の記録は、残る二つの記録であることとなる。

そこで先ず、現金帳の紙葉の左側部分丁数一に於ける七月一日付の記録についてその記録方法を検討することとする。サヴァリーはこれの記録方法に就いては何等言及しておらず、故にその解明の手掛りは、この記録の示す六千リ

「ブルの現金の金額に附されている「私の元入資本」なる文言の内容に求めることを要す。そこでこの「元入資本」に就いての解説をサヴァリーに求めるならば、彼は会社定款の作成方法の解説に於いて「二人の商人から成る会社の定款。彼らは元入資本とすべく各々現金をもたらし小売商を営むために店を構える」⁽³⁸⁾という例を掲げ、元入資本を会社設立のために出資される現金であるとする。⁽³⁹⁾とすれば、この現金帳に於いて示されている「七月一日 私の元入資本六千リール」という記録の内容は、「七月一日に会社を設立し営業を開始するにあたって、営業主である私が出資した現金六千リール」ということであることとなる。このことは、かかる現金帳の表紙に「一六七三年七月一日開始」と明記されていることから、「七月一日に現金帳の記入を開始するにあたって私がもたらした現金六千リール」と更に言い換えて得ることとなる。つまり、この七月一日付の記録は、この帳簿の記入を開始するにあたり、もともと存在した現金の金額を示しているのである。斯くの如く考えるならば、この記録は、先に見た、現金帳の繰越の記録、即ち新勘定口座の左側部分に於ける記録と何等変わるものではないこととなり、それ故に他の帳簿からこの現金帳への転記を必要としない記録であることとなる。

次に、その記録方法を検討すべきは、現金帳の紙葉の左側部分丁数一に於ける「二月三日付の記録である。そこに記された文言は「先の七月一日より一六七三年二月三日までの私の家事費用についての支払い」であり、この文言から、当該日付を以て過去半年分の家事費用（二五〇〇リール）の支払われたことが判る。これに係りサヴァリーは、現金帳には「家事費用に至るまでをそこに記載すべきである」⁽⁴⁰⁾とし、更に「現金帳に、この費用を個別的に記録することは必要でない」⁽⁴¹⁾として或る一定期間の家事費用に就いて支払った額をまとめて現金帳に記録するように勧めている。⁽⁴²⁾そして「如何なる事柄も、それが他のいずれかの帳簿に於いて前以て示されておらぬ限り、この抄録・理由帳（及び現金帳）に於いて記されることはない」と既に述べたが、それ故に、この抄録・理由帳（及び現金帳）の備えを

欲する者は、その自らの家事費用を仕入日記帳 (Journal d'achat) に記載すべきである。⁽⁴³⁾」と述べ、その記録方法を示唆する。かかる示唆に依れば、現金帳に於ける当該記録は、仕入支払日記帳からの転記を以て示されていると解すべきこととなる。

右に於いて明らかな如く、現金帳の記録方法の検討にあたり、残されていた四つの記録のうち、その紙葉の右側丁数一に於ける十二月三十一日付の家事費用支払額の記録のみが仕入支払日記帳を転記元とする記録であった。即ち、家事費用の支払を内容とする取引が或る一定期間内に何度か生じた場合、それぞれに於いて支払われた現金の金額を或る一定期日を以て合計し、その合計額を仕入支払日記帳に先ず記録し、そこから更に現金帳当該部分に転記するのである。また、これ以外の他の三つの記録はいずれも、それに先立つ転記元の記録を持たぬ記録であった。即ち、その左側丁数一の第一行目、七月一日付の記録は、営業開始時点・現金帳記入開始時点に於いて営業主によりもたらされた現金の金額を示し、その時点に於いて直接そこに記入されている。またその右側丁数一の最後の記録は、現金帳の或る一定期間の記録を締切るにあたっての締切時点の現金の残高を示し、当帳簿内に於ける計算の結果を以て記入される。最後に、その左側丁数二に於ける記録は、現金帳の記入を新たに開始するための現金の在高を示し、その右側丁数一の最後の記録を写すことを以てそこに記入されている。

前段に於ける、現金帳の記録方法の検討結果と、それ以前に為されていたその検討結果との両方を手掛りとして、現金帳の実際の記録対象を次の如く考えることを得る。即ち、この帳簿には所謂現金勘定口座が開設されており、その借方である左側部分が、営業主のもたらした現金の金額、売上・貸付債権の回収に係り受取った現金の金額、借入によって得た現金の金額、即ち当帳簿にとって増加した現金の金額を記録対象とし、またその貸方である右側部分が、仕入・借入債務の決済のために支払った現金の金額、貸付に係り相手に渡した現金の金額、家事費用として支払った

現金の金額、即ち当帳簿にとって減少した現金の金額を記録対象としている。そして、以上の借方・貸方に於ける実際の記録対象に基づき、それらを計算要素として、残っている現金の金額即ち現金の残高が、当帳簿の締切の時点はもろんのこととして、常時計算可能となるのである。

以上に於いて我々は、サヴァリーいうところの中規模取引を為す商人の備えるべき複数の会計帳簿に就いて、彼と与えるそれら諸帳簿の記帳例示の詳細なる観察を以て、それら諸帳簿の記録方法を解明し、それを手掛りとしてそれら諸帳簿の記録対象を詳かにしてきた。そこに於いて我々の観察対象となった会計帳簿は、次の如き組合わせから成る各三種類二組の諸帳簿であった。即ち、それぞれに人名索引目録を添附した「仕入及び支払日記帳」・「掛売上及び金銭受取日記帳」という二種類の日記帳と「現金帳」との三種一組、および、人名索引目録を持たない二種類の同日記帳と現金帳をその中含む「抄録・理由帳」との三種一組である。そして、かかる組合せから成る諸帳簿に就いて、前者にあつては人名索引目録の作成方法に着目して、その目録と諸帳簿との記録方法上の関連を解明することにより、以てその記録対象を明示し得た。また、後者にあつては「抄録・理由帳」の記録方法に着目し、それを含めた諸帳簿間の記録方法上の関連を手掛りとして、その記録対象を明示し得た。

斯くして我々の得た検討結果は以下の如し。即ち、人名索引目録を含む諸帳簿に就いては、「仕入及び支払日記帳」に添附された当該目録が同日記帳に記録された仕入・借入債務の発生・消滅に係る取引の相手即ち債権者の氏名の一覧表であり、この表の氏名に附して当該日記帳の丁数あるいは丁数と「S」の文字とを合わせて記すことにより、同日記帳上の取引記録に基づき当該人物に対する債務の発生・消滅を表示し、また「掛売上及び金銭受取日記帳」に添附された当該目録は同日記帳に記録された売上・貸付債権の発生・消滅に係る債務者氏名の一覧表であり、同日記帳上の取引記録に基づき、その丁数と「S」の文字とを氏名の脇に附すことにより、当該人物に対する債権の発生・消

減を表示している。かくてかかる記録方法を手掛りとして、人名索引目録すなわち債権者人名索引目録と債務者人名索引目録とをそれぞれに添附している二種類の日記帳の記録対象のうちから、当該日記帳記録の本質に係る記録対象を、取引に於いて発生・消滅した債務・債権と規定し得ることとなる。

また、人名索引目録に代えて「抄録・理由帳」を備える場合の諸帳簿に就いては、「仕入及び支払日記帳」が仕入・借入債務の発生・消滅取引、家事費用の支払取引に係る事柄を記録し、この記録に基づき、発生した債務の金額が「抄録・理由帳」の丁数一に於ける当該債権者の人名勘定口座の右側部分に、消滅した債務の金額がその左側部分に、支払った現金の金額が「現金帳」の紙葉の右側部分に、同日記帳から個別に転記される。また、「掛売上及び金銭受取日記帳」は、売上・貸付債権の発生・消滅取引に係る事柄を記録し、この記録に基づき、発生した債権の金額が「抄録・理由帳」の丁数二および三に於ける当該債務者の人名勘定口座の左側部分に、消滅した債権の金額がその右側部分に、受取った現金の金額が「現金帳」の紙葉の左側部分に、同日記帳から個別に転記される。さらにまた、「現金帳」には、両日記帳からの転記に基づく記録のみならず、その紙葉の左側部分に営業主のもたらした現金の金額、その右側部分には当帳簿を締切するための現金の残高が、直接的にあるいは計算の結果、記録されている。かくて、かかる記録方法を手掛りとして、その記録対象を、発生・消滅した債務・債権の金額、増加・減少した現金の金額と確定し得ることとなる。

大規模商人の会計帳簿の記録対象

サヴァリーは、「比較的大規模な取引を行う商人」⁽⁴⁴⁾が備えるべき会計帳簿として、次の十一種類の帳簿を掲げている。即ち「仕入帳」、「仕入帳の抄録帳」、「日記帳」、「日記帳の抄録帳」、「売上帳」、「金銭支払帳」、「現金帳」、「商品

銘柄帳」、「染色帳」、「債務控え帳」、「債権控え帳」である。以下に於いては、かかる諸帳簿の記録方法を検討し、以てその記録対象の解明を試みるべきこととなる。しかしながらここに問題が生じる。即ち、最終的に記録対象を解明するためには、その手掛りを諸帳簿の記録方法に求め、この記録方法の解明のためには、諸帳簿に於ける実際の記録の観察が必須となる。ところが、この十一種類の会計帳簿に係り、サヴァリーがその実際の記帳例示を与える帳簿はそのうちの僅か三種類の帳簿のみ。残る八種類の帳簿に就いて、その記録方法延いてはその記録対象、如何に解明すべきであらうか。

右に於いて生じた問題を解決するための手掛りは、サヴァリーの次なる記述に求め得る。即ち「自らの營業に於いて良き秩序を保つために、金糸・銀糸・絹糸織物の小売普通商人にとって前述の多数の帳簿（十一種類）が必要であるが、かなり手広く毛織物を扱う、同じ団体のその他の普通商人および羅紗商人の団体に属する個人にとってもまたそれは同様である。なんとすればその相違は、唯商品の質に於ける相違に過ぎぬからである。但し、綾織綿布、綿入麻織物、綿毛交織物、英国産羅紗、飾り紐、平打紐、毛皮、食料品、その他、業務上生じる不都合により正確には秩序付け得ない種類の商品を混合して販売する普通商人に関しては三種類の帳簿を持つだけで充分である。⁽⁴⁵⁾」サヴァリーがここに、三種類の帳簿を持つだけで充分であるとする商人は、先の中規模取引を為す商人のことであり、その三種類の帳簿は「仕入及び支払日記帳」、「掛売上及び金銭受取日記帳」、「現金帳」を含めた「抄録・理由帳」である。要するに、十一種類の会計帳簿の備付けは、取扱う商品の質を問わず広く商人全般に対して妥当するということを前提として、種々雑多な商品を扱う商人に就いては、その備えるべき帳簿を十一種類から三種類に集約し得るということである。かかる会計帳簿の数に於ける集約は、単に帳簿の数が減少しただけであって、それらの記録内容にはさほど大きな相違は無いと考へ得るのではなからうか。斯くの如く考へ得るとするならば、十一種類の会計帳簿の記録方

法と三種類の会計帳簿のそれとの間には、何等かの共通性が存しているのではないかと推察し得ることとなる。そこで以下に於いては、この十一種類の会計帳簿、就中、記帳例示の存せぬ八種類のものに就いて、各帳簿に係るサヴァリーの解説を抛り所としつつ、それらの名称と先に見た中規模取引を為す商人の会計帳簿の名称およびその記帳例示に係る我々の観察結果とを参看して、その記録方法の検討を進めていくこととする。

まず、前述の十一種類の会計帳簿のうち、「仕入帳」、「仕入帳の抄録帳」、「日記帳」、「日記帳の抄録帳」、「売上帳」、「金銭支払帳」、「現金帳」の各々に就いて、サヴァリーのそれらの記録方法の解説を傾聴しつつ、既に我々の検討した、中規模取引を為す商人の会計帳簿の名称・記録方法・記録対象を参看して、それら諸帳簿の記録方法、延いては記録対象の解明を試みることにする。但し、この七帳簿に就いては記帳例示全く存せず、それ故に以下の検討にとつて非常に役立つこととなる、中規模取引を為す商人の会計帳簿の名称及び記録対象をここに記しておくこととする。以て銘記すべし。即ち「仕入及び支払日記帳」、その記録対象は掛仕入取引及び金銭借入・支払取引に係る事柄、「掛売上及び金銭受取日記帳」、その記録対象は掛売上取引及び金銭貸付・受取取引に係る事柄、「抄録・理由帳」、その記録対象は丁数一に於いて発生・消滅した債務の金額、丁数二・三に於いて発生・消滅した債権の金額、「現金帳」、その記録対象は増加・減少した現金の金額、である。また前者二つの日記帳が転記元である基礎帳簿に、後者二つの帳簿が転記先である主要帳簿に相当することも加えて銘記しておくことを要す。

サヴァリーは「仕入帳」に係り「彼ら（小売商人）が仕入れる総ての商品を、卸売商人によって与えられたその送り状に従って、この帳簿に日々記載しなければならない。」⁽⁴⁶⁾と述べ、また「金銭支払帳」に係り、「商人は、自らが支払を為すべき人々に対して支払った、また家事費用として——この費用に就いては細目に亘ってではなく例えば二・三百リーブルの如く纏めて——、家賃として、その他総じて何らかの費用として支払ったところの総ての金銭を

この帳簿に記載する⁽⁴⁷⁾。」と述べる。かかる解説から、「仕入帳」には商品の仕入取引に係る事柄が、「金銭支払帳」には金銭支払取引に係る事柄が記録されることが判る。また、この両帳簿の名称から判断するならば、この二種類の帳簿を一つに集約した帳簿が、中規模取引を為す商人の「仕入及び支払日記帳」に相当すると推察し得ることとなる。

次に、サヴァリーは、「日記帳」に係り「掛にて販売された商品に関するあらゆる事がこの帳簿に記載されるべきである⁽⁴⁸⁾。」と述べ、この帳簿を「掛売上日記帳 (Journal de vente à credit)⁽⁴⁹⁾」とも称している。また「売上帳」に就いては、これを「現金売上帳 (livre de vente au comptant)⁽⁵⁰⁾」とも別称し「現金にて販売された総ての商品がこの帳簿に記載され、またここには、債務者から受取った金銭の金額も記載される⁽⁵¹⁾。」と解説している。サヴァリー斯く言うところから、「日記帳」は商品の掛売上取引に係る事柄を記録する帳簿であり、「売上帳」は商品の現金売上取引と債務者からの金銭の受取即ち債権の回収取引に係る事柄を記録する帳簿であることが明らかとなる。かかるサヴァリーの解説と両帳簿の名称とを合わせて考えるならば、この二種類の帳簿を一つに集約した帳簿が、中規模取引を為す商人の「掛売上及び金銭受取日記帳」に相当すると推察し得ることとなる。

更に、「仕入帳の抄録帳」に係りサヴァリーは「この帳簿は借方と貸方とを以て付けられる。即ち、貸方であるところの、帳簿を開いて向って右側には、仕入帳上に記載されている商品の金額が、その金額の存する同帳簿の丁数を同時に示しつつ、一項目毎にもたらされる。また借方と称される向って左、もう一方の側には、後述の如く、為されるであろう支払がもたらされることとなる⁽⁵²⁾。」と解説し、また「日記帳の抄録帳」或いは彼が「掛売上日記帳の抄録帳 (le livre extrait du Journal de vente à credit)⁽⁵³⁾」とも別称する帳簿に就いては「前述の仕入帳の抄録帳と同じ様式により、借方と貸方とを以て付けられる⁽⁵⁴⁾」と解説するとともに、前述の「売上帳」に記載されている「債務者から受取った金銭の金額⁽⁵⁵⁾」に係り「その金額は、前述の掛売上日記帳の抄録帳に於いて債務者のために開設された勘定口座にも

たらされる。⁽⁵⁶⁾」と指摘している。また「現金帳」に就いては「借方と貸方とを以て付けられるべき、正に現金売上帳及び金銭支払帳の抄録であり、借方に受取った総ての現金が、また貸方には支払った総ての現金が日々記載される。⁽⁵⁷⁾」と解説している。

右のサヴァリーの解説を手掛りとして脳漿を絞れば、「仕入帳の抄録帳」には所謂債権者人名勘定口座が開設されており、その貸方、右側部分に「仕入帳」から、取引に係り発生した債務の金額が転記されており、その借方、左側部分に「金銭支払帳」から、取引に係り消滅した当該債務の金額が転記されていると、また、「日記帳の抄録帳」には所謂債務者人名勘定口座が開設されており、その借方に「日記帳」から、取引に係り発生した債権の金額が、その貸方に「売上帳」から、取引に係り消滅した当該債権の金額が、それぞれ転記されていると推察し得ることとなる。更に「現金帳」に就いては、そこに所謂現金勘定口座が開設されており、その借方に「売上帳」から、受取った現金の金額が、またその貸方に「金銭支払帳」から、支払った現金の金額が転記されていると考え得る。とすれば、この「仕入帳の抄録帳」は中規模取引を為す商人の「抄録・理由帳」の丁数一の部分に、また「日記帳の抄録帳」は同帳簿丁数二・三の部分に相当する帳簿であり、「現金帳」はその名称の通り同商人の「現金帳」と同様の帳簿であると看做し得ることとなる。

大規模取引を為す商人の会計帳簿と中規模取引を為す商人のそれとの以上の如き対応関係に基づき、中規模商人の会計帳簿の記録方法・記録対象を手掛りとして、前記七種類の会計帳簿の記録対象を次の如く推定し得る。即ち「仕入帳」は掛仕入・金銭借入取引即ち債務発生取引に係る事柄を、「日記帳」は掛売上・金銭貸付取引即ち債権発生取引に係る事柄を、「金銭支払帳」は現金仕入取引と現金支払（債務消滅）取引とに係る取引を、「売上帳」は現金売上取引と現金受取（債権消滅）取引とに係る事柄を、記録対象とする基礎帳簿に相当する帳簿である。また「仕入帳の抄

録帳」は債権者人名勘定口座を收容し、その貸方に於いて発生した債務の金額を、その借方に於いて消滅した債務の金額を、記録対象とし、「日記帳の抄録帳」は債務者人名勘定口座を收容し、その借方・貸方に於いて発生・消滅した債権の金額を記録対象とする主要帳簿に相当する帳簿である。更に「現金帳」は現金勘定口座を擁し、その借方に於いて増加した現金の金額を、その貸方に於いて減少した現金の金額を記録対象とする主要帳簿に相当する帳簿である。

次に、大規模取引を為す商人の残る四帳簿のうち、まず「商品銘柄帳」に就いて、その記録方法を検討し、その検討結果を手掛りとしてこの帳簿の記録対象の解明を試みることにする。サヴァリーはこの帳簿に係り「仕入れられた商品の数量を把握するために、借方と貸方とを以て、それはまた付けられる⁽⁵⁸⁾」と述べ、これを更に詳しく次のように解説する。即ち「この帳簿は借方と貸方とを以て付けられるべきである。すなわち、帳簿を開いて向って左側には、仕入れられた商品を記載することを要し⁽⁵⁹⁾」、「そのいずれかが確かに販売された時には、その商品が記載されている左側の紙葉の当該部分に向い合う、右側の紙葉の部分に於いて、為された販売に就いて言及することを要す。その際、それに着手した日付およびその残りの部分を販売した日付を明示し、更に、それが掛にて販売されたのであれば日記帳の丁数を、現金にて販売されたのであれば現金売上帳の丁数を顯示する⁽⁶⁰⁾。」この解説に続けて彼は、次の如き記帳例示を与えている(次頁見開参照のこと、併せてその邦訳を示した)。

この「商品銘柄帳」の記録方法を明らかにすべく、右のサヴァリーの解説を拠り所として、その記帳例示を観察する。サヴァリーの述べる如く、この帳簿の見開左側部分には、仕入れた商品が記載される。即ち「仕入帳丁数一の頁表より明らかな如く、一六七三年八月十四日ピエールより仕入れた商品」なる標記の下に、商品の種類毎に場所を分けて、その名称と数量とが記されている。例えばその一つである商品番号一は「黄色無地の縞子、三四オンス半⁽⁶²⁾」なる記録である。またこの帳簿の見開右側部分には、その左側に記載された商品に係る販売の状況が記されている。即

LIVRE DE NUMERO

*Marchandises vendues, tant sur le livre Journal, que sur le
livre de vente au comptant.*

1. Entamé pour 10. aunes le 10. Octobre 1673. comme il appert au livre
Journal fol. 40.
Et le restant vendue le 4. May 1674. au livre de vente fol. 20.
2. Entamé pour 6. aunes le 4. Fevrier 1673. au livre de vente. fol. 15
Et le restant le 15. May 1673. à Monsieur Langlois au journal. fol. 30.
3. Entamé pour 15. aunes le 18. Juin 1673. pour Monsieur Pierre au li-
vre journal. fol. 10.
Et le restant au livre de vente le 10. Decembre 1673. fol. 25
4. Entamé pour 6. aunes le 13. Juin 1674. au journal. fol. 52.
5. Entamé pour 5. aunes le 17. Aoust 1673. au livre de vente. fol. 15.
Et le restant le 4. Septembre 1673. à M^r François au journal. fol. 40.
- 6.
7. Entame pour 10. aunes le 7. Janvier 1674. pour Monsieur Gelé au
journal. fol. 50.
Et le restant le 14. Fevrier 1674. au livre de vente. fol. 30.
- 8.
- 9.

F O R M U L E D' U N

N° *Marchandises achetées de Pierre le 14. Aoust 1673. appert
au Livre d'achat fol. 1. recto.*

1. Satin plain jaune 34. aunes & demie.

2. Dit bleu 30. aunes trois quarts.

3. Velours trois poils noir 28. aunes deux tiers.

4. Dit deux poils 27. aunes & demie.

5. De Nicolas le 10. Septembre 1673. appert au livre d'achat fol. 2.
verso
Armoisin blanc de Lyon 35. aunes

6. Dit jaune 40. aunes & demie.

7. Taffetas lustré noir en demie aune 45. aunes deux tiers.

8. Dit 37. aunes & demie

9. Dit 35. aunes deux tiers.

Marchandises

商 品 銘 柄 帳 の 様 式

番 仕入帳丁数 1 頁表に明らかな如く, 1673年 8 月 14 日. ビエールより仕入れた商品		日 記 帳 に 於 い て , ま た は 現 金 売 上 帳 に 於 い て 販売された商品	
1. 黄色無地の絹子	34 オース半.	1. 日記帳に明らかな如く, 1673年 10 月 10 日, 10 オース分売り始め 丁数 40.	また売上帳に於いて 1674 年 5 月 4 日 その残りを販売 丁数 20.
4. 同 (黒ビロード) 緯糸 2 本	27 オース半.	4. 日記帳に於いて 1674 年 6 月 13 日, 6 オース分売り始め 丁数 52.	
5. 仕入帳丁数 2 頁裏に明らかな如く, 1673 年 9 月 10 日 = コラより リモン産白アルマザン	35 オース.	5. 売上日記帳に於いて 1673 年 8 月 17 日, 5 オース分売り始め 丁数 15.	また日記帳に於いて フランソワ氏に 1673 年 9 月 4 日 その残り 丁数 40.
7. 半オース毎に黒の艶のあるタフト	45 オース 2/3	7. 日記帳に於いて ジュレ氏に対し 1674 年 1 月 7 日 10 オース分 売り始め 丁数 50.	また売上帳に於いて 1674 年 2 月 14 日 その残り 丁数 30.
8. 同	37 オース半	8.	
9. 同	35 オース 2/3	9.	

ち「日記帳に於いて、または現金売上帳に於いて販売された商品」なる標記の下に、例えば左側部分の一番の商品に係り、その右側部分には「日記帳に明らかな如く、一六七三年一〇月一〇日、一〇オース分売り始め 丁数四〇」、さらにその下段に続けて「また売上帳に於いて一六七四年五月四日その残りを販売 丁数二〇」と記録されている(前掲邦訳該当部分を参照されたい)。

かかる記帳例から明らかな如く、この帳簿の見開左側部分には、商品の仕入取引に係り、受入れた商品の種類毎の数量が「仕入帳」に於ける当該取引の記録に基づき転記されており、またその右側部分には、左側部分に記録されている各商品の販売取引に係り、引渡した各商品の数量が「日記帳」あるいは「現金売上帳」上の当該取引記録に基づき転記されているのである。ここにいう「仕入帳」、「日記帳」、「現金売上帳」は、いずれも基礎帳簿に相当する帳簿であり、かかる三種類の帳簿を転記元として、この「商品銘柄帳」に記録が為されるのである。かかる記録方法を手掛りとするならば、当帳簿の記録対象は、その左側部分に於いて、商品仕入取引に係る商品の種類別受入数量であり、その右側部分に於いては、商品売上取引に係る商品の種類別引渡数量であることとなる。

次に、「染色帳」に就いて、その記録方法を手掛りとして記録対象の解明を試みるべきであるが、サヴァリーはこの帳簿に係る記帳例示を与えていない。従って以下に於いては、サヴァリーの為す、この帳簿に係る記述を参考にし、以てこの課題に取り組むべきこととなる。サヴァリーは次の如く解説する。即ち「絹糸・金糸・銀糸織物商人は、染色すべき商品をほとんど取扱うことは無いとはいえ、それでも、白色無地のラチネ織物(表毛の縮れた搦み織の厚地毛織物)、ルベシュ(英国産の羅紗の一種)、ロンドン産サージ織物(綾織の毛織物)を仕入れる人々が、その後それらを染色させるために、必要なる第九の帳簿であるところの染色帳をも付けることは適切なことである。⁽⁶³⁾」サヴァリー斯く言うところからは、かかる帳簿の記録方法は解明し得ぬが、この帳簿が商品として仕入れた織物のうち、特に白色無

A la Foire du Landy. 1673.

A Pierre.	2000. l.
A Paul.	3000. l.
A Nicolas.	1500. l.
	<hr/>
	6500. l.

A la Foire de S. Denys 1673.

A François.	1500. l.
A Pierre.	2000. l.
A Guillaume.	1400. l.
	<hr/>
	4900. l.

A la Foire S. Germain. 1674.

A Paul.	1900. l.
A Nicolas.	1400. l.
A Thomas.	1300. l.
	<hr/>
	4600. l.

En divers temps.

A Nicolas au 15. Novembre 1673.	3000. l.
A Pierre au 30. dudit.	2000. l.
A Guillaume au 20. Decembre.	1500. l.
A Thomas au 2. Janvier 1674.	4000. l.
A François au 15. dudit.	1200. l.
	<hr/>
	11700. l.

Formule d'un livre des dettes passives appelé carnet.

A Pierre, au 15. Septembre 1673. par mon biller.	10000.l.
A Nicolas, par obligation au premier Decembre.	12000.l.
A François, par obligation.	15000.l.
	<hr/>
	37000.l.

Comptant.

A François.	3000.l.
A Pierre.	3500.l.
A Denis.	300.l.
A Guillaume.	400.l.
	<hr/>
	7200.l.

Payemens d'Aoust 1673.

A Jean.	4000.l.
A François.	3250.l.
A Pierre.	5400.l.
	<hr/>
	12650.l.

Toussaints 1673.

A Guillaume.	5000.l.
A Denis.	9000.l.
A François.	4500.l.
	<hr/>
	18500.l.

Rois 1674.

A Jacques.	7000.l.
A Paul.	3000.l.
A Jean.	4000.l.
A Denis.	3000.l.
	<hr/>
	17000.l.

Pasques 1674.

A Alexandre.	5000.l.
A Lucas.	3500.l.
A Pierre.	6000.l.
	<hr/>
	14500.l.

控え帳と呼ばれる債務帳の様式

ピエールに対し, 1673年9月15日に, 私の手形により	10000リーブル
ニコラに対し, 11月1日に債務証書によって	12000リーブル
フランソワに対し, 債務証書によって	15000リーブル
	<u>37000リーブル</u>

即 座 に

フランソワに対し	3000リーブル
ピエールに対し	3500リーブル
ドゥニに対し	300リーブル
ギヨームに対し	400リーブル
	<u>7200リーブル</u>

1673年8月の支払

ジャンに対し	4000リーブル
フランソワに対し	3250リーブル
ピエールに対し	5400リーブル
	<u>12650リーブル</u>

1673年万聖節

ギヨームに対し	5000リーブル
ドゥニに対し	9000リーブル
フランソワに対し	4500リーブル
	<u>18500リーブル</u>

⋮

⋮

⋮

1673年サンドゥニの定期市に於て

フランソワに対し	1500リーブル
ピエールに対し	2000リーブル
ギヨームに対し	1400リーブル
	<u>4900リーブル</u>

1674年のサンジェルマンの定期市に於て

ポールに対し	1900リーブル
ニコラに対し	1400リーブル
トマスに対し	1300リーブル
	<u>4600リーブル</u>

夫々の時に

ニコラに対し, 1673年11月15日に	3000リーブル
ピエールに対し, 同30日に	2000リーブル
ギヨームに対し, 12月20日に	1500リーブル
トマスに対し, 1674年1月2日に	4000リーブル
フランソワに対し, 同15日に	1200リーブル
	<u>11700リーブル</u>

地の織物を染色する際に必要となる帳簿であることは理解し得る。とすれば、この帳簿は前述の商品銘柄帳と密接なる関連を有すると推察し得ることとなる。即ち、この白色無地の織物は、その仕入時点に於いて先ず「仕入帳」に記録され、その後そこから「商品銘柄帳」の左側部分に、その数量を以て転記される。そして、この織物を染色するにあたり「商品銘柄帳」から「染色帳」へと記録が移され、染色の後、再び「商品銘柄帳」の左側部分にその数量が記録される。斯くの如く推察し得るとすれば、この「染色帳」は「商品銘柄帳」の補助的な帳簿であると看做し得ることとなる。かくて、両帳簿のかかる関係に着目し、「商品銘柄帳」の記録対象を手掛りとするならば「染色帳」の記録対象は、各種商品のうちの特に白色無地の商品の染色に係る受入・払出数量であると推定し得ることとなる。

次に、「債務控え帳」に係りサヴァリーは「商人は、自らの総ての債務、即ち商品の仕入先であるところの商人または職人に対して、また自らに金銭を貸付けている他の人々に対して自らが負うている総てのものをこの帳簿に記載すべきであり、この帳簿は、自らが現金にて或いは掛に対して多かれ少なかれ支払うべきものを難なく知るための正に補助抄録 (un sous-extraît) である⁽⁶⁴⁾」とその内容を解説し、前掲の如き記帳例示を与えている⁽⁶⁵⁾ (126頁以下見開参照のこと、併せてその邦訳を示した)。そして、更に彼は「商人は通常、掛または現金にて商品を仕入れる。掛仕入に就いては種々の支払方法すなわち既述の如く一つ、二つ、三つ或いは四つの支払方法による。定期市毎に支払うべく商品を仕入れることもあれば、三ヶ月後、六ヶ月後に支払うべくそれを仕入れることもあるが、その支払方法は、仕入先の人々と取決めるによる。彼ら商人が支払の満期となる期日、及びその期日に自らが支払うべきものを瞬時に知るために、支払を為すべき期日別に、その支払方法が控え帳に記載されねばならぬ理由がここに在る⁽⁶⁶⁾。」と述べている。

「債務控え帳」に係るサヴァリーの右の解説及びその記帳例示から明らかな如く、この帳簿には、商品の掛仕入、現金の借入等の取引に係り発生し、その後未決済のまま残っている債務の金額が、その支払相手すなわち債権者の氏

名とともに、その支払期日別に記録されている。つまりこの帳簿は、商人が負うている債務の金額の支払期日別債権者人名別一覧表であると看做し得るのである。そして、この帳簿の記録方法に係りサヴァリーは「同時期に支払うべき総ての事項を抜き出すために、仕入帳の抄録帳を手取ることを要す」と述べる。⁽⁶⁷⁾つまり「債務控え帳」に記録を為すためには、「仕入帳の抄録帳」の記録が参照されるということである。ここにサヴァリーのいう「仕入帳の抄録帳」は、既に見た通り、取引に係る債権者人名勘定口座を擁する帳簿であった。そして、その各勘定口座の右側部分には取引に係り発生した債務の金額が、また左側部分には消滅した当該債務の金額が記録されていた。ここに、この左右両部分に於ける記録を参照するとすれば、当然、それらを計算要素として各勘定口座の残高が求められることになる筈である。かかる各勘定口座の残高を、その支払期日を基準として分類し、債権者人名別に纏めて記録した帳簿が即ち「債務控え帳」となると推察し得る。とすれば、「債務控え帳」の記録対象は、債務の支払期日別・債権者人名別の残高であることとなる。

最後に、「債権控え帳」に係りサヴァリーは「かなり手広く取引を行い、そして多くの貸付けを為している商人は、自らが受取るべきものを一覧の下に知り、その取立を命じるために、債務控え帳——これの様式は以前に示したが——と同様に、自らの債権の控え帳を作成すべきである。このために彼らは、自らの債務者を織別すべきである。即ち、彼らが日記帳・抄録帳から抜き出したところの人々のうち、債券によって支払義務を負う人々を一纏めに、予約・契約によって支払義務を負う人々を別の一纏めに、覚え書によって彼らに支払を為すべき人々をまた別の一纏めにすべきである。」⁽⁶⁸⁾と解説し、次の如き記帳例示を与えている⁽⁶⁹⁾(次頁参照のこと、併せてその邦訳を示した)。かかる解説・例示によれば、この「債権控え帳」は、商人が有する債権の金額の、債権種類別・債務者人名別一覧表であることとなり、前述の「債務控え帳」とその様式の等しい帳簿であることが判る。また、この帳簿の記録方法に就いては、

Carnet de mes debtes actives, par Obligation, & Sentence.

Monsieur le Marquis tel.	L 4000
Monsieur le Comte tel	L 2500.
Monsieur tel, Conseiller	L 1200.
Monsieur tel, Maître des Comptes	L 1350.
Monsieur tel par Sentence	L 2000.

Par Promesses, & Parties arrestées.

Monsieur le Duc tel	L 6000
Monsieur le Marquis tel	L 2000.
Monsieur tel Conseiller	L 300.
Monsieur tel Secrétaire du Roy	L 1400.

Debiteurs sur le Journal qui ne sont point arrestez.

Monsieur tel Conseiller	L 400.
Monsieur tel Maître des Comptes.	L 300.
Le sieur tel Tailleur	L 400.
Monsieur tel Brodeur	L 200.
Monsieur tel Tapissier	L 300.

債券及び判決による、私の債権控え帳

侯爵某氏	4000リーブル
伯爵某氏	2500リーブル
判事某氏	1200リーブル
帳場主人、某氏	1350リーブル
某氏、判決より	2000リーブル

予約及び契約により

公爵某氏	6000リーブル
侯爵某氏	2000リーブル
判事某氏	300リーブル
国王秘書官某氏	1400リーブル

未決済の日記帳上の債務者達

判事某氏	400リーブル
帳場主人某氏	300リーブル
洋服店某氏	400リーブル
刺繍職人某氏	200リーブル
家具商人某氏	300リーブル

「日記帳・抄録帳」の記録の参照に基づくと推察することを得る。サヴァリーいうところのこの「日記帳・抄録帳」は、曾て我々の見た「日記帳の抄録帳」であると推察され、とすれば、かかる帳簿の記録の参照を以て、各債務者人名勘定口座の残高が明らかとなることとなる。そして、この各勘定口座の残高を債権の種類を分類基準として纏め、一表に記録した帳簿が即ち「債権控え帳」となると推察し得る。かくて「債権控え帳」の記録対象を債権の種類別・債務者人名別残高と推定し得ることとなる。

大規模取引を為す商人の会計帳簿十一種に就いて、各々の記録対象の検討は前段に於いて総て了した。かくて、その検討結果の綜覧を得ることとなる。即ち、「仕入帳」、「日記帳」、「売上帳」、「金銭支払帳」はいずれも基礎帳簿に相当する帳簿であり、その記録対象は、債務発生取引に係る事柄、債権発生取引に係る事柄、現金仕入・支払（債務消滅）取引に係る事柄、現金売上・受取（債権消滅）取引に係る事柄であった。また「仕入帳の抄録帳」、「日記帳の抄録帳」は主要帳簿に相当する帳簿であり、その記録対象は発生・消滅した債務の金額、発生・消

減した債権の金額であったが、この両記録対象は更に要約され、「債務控え帳」、「債権控え帳」の記録対象としての債務の残高、債権の残高となった。また「現金帳」は主要帳簿に相当する帳簿であり、その記録対象は増加・減少した現金の金額であった。更に「商品銘柄帳」は「染色帳」なる補助的な帳簿を従えた主要帳簿であり、その記録対象は受入・引渡した商品の数量であった。

以上に於いて我々は、サヴァリーの記述に従い、小規模・中規模・大規模の各取引を為す商人の会計帳簿に就いて、その記録方法を手掛りとしてその記録対象を次の様に明らかにした。即ち、小規模取引を為す商人の会計帳簿は、二種類の日記帳を以て、当該商人の為す総ての取引に係る事柄を記録対象とし、中規模取引を為す商人の会計帳簿は、基礎帳簿たる二種類の帳簿を以てその取引に係る総ての事柄を、人名索引目録を以て発生・消滅した債権・債務を、主要帳簿たる二種類の帳簿を以て発生・消滅した債権・債務の金額、増加・減少した現金の金額を、記録対象としていた。また大規模取引を為す商人の会計帳簿は、基礎帳簿たる四種類の帳簿を以てその取引に係る総ての事柄を、主要帳簿たる四種類の帳簿を以て発生・消滅した債権・債務の金額（債権・債務の残高）、増加・減少した現金の金額、受入・引渡した商品の数量を、記録対象としていた。とするならば、ここに明らかとなった会計帳簿の記録対象を手掛りとして、商事王令上の会計帳簿記録の本質を説明すべきこととなる。果して如何に。

注

(1) Savary, J., *Le Parfait Negociant* 初版、第一編 二九一—二九七頁（なお同書第八版、第一巻第一部 三三三—三三七頁に於いても同様の記帳例示が与えられている）。

(2) Savary, J., *Le Parfait Negociant* 初版、第一編 二九四頁、及び同書第八版 第一巻第一部 三三五頁。

(3) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三三八頁。
 (4) 現金による商品売上取引に就いて、サヴァリーは何等言及していないが、かかる取引が常に現金の受取をともなうことを考えるならば、「掛売上及び金銭受取日記帳」にその記録の為されるであらうことの容易に推察し得る。

(5) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九一頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三三三頁。
 (6) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九四頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三三五・三三六頁。
 (7) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九一頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三三三頁。
 (8)(9) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三三三頁。
 (10) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七〇—二七七(なお同書第八版、第一卷第一部 三〇七—三二四頁に於いても同様の記帳例示が与えられている)。

(11)(12)(13) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六九頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇七・三〇八頁。
 (14) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二三頁。
 (15) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七二・二七三頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二〇頁。
 (16) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七三頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二〇頁。
 (17) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二四頁。
 (18)(19)(20) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二八二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二六頁(挿入—山添)。

(21) 「抄録・理由帳」に係り Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二八三—二八九頁(なお同書第八版、第一卷第一部 三二七—三二九頁に於いても同様の記帳例示の参照を得る)。「現金帳」に係り Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七九—二八一頁(なお同書第八版、第一卷第一部 三二五—三二七頁に於いても同様の記帳例示の参照を得る)。
 (22) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二八二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二六頁。
 (23) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二八三頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二六・三二七頁(省略—山添)。

(24)(25) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二四頁。
 (26) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二八三頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二六・三二七頁。

- (27) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版 第一編 二九〇頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三三二頁(挿入—山添)。
- (28) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 二八二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二六頁。
- (29)(30) 吉田威、單式簿記の本質(商経論叢、第一五卷第三・四号 一九八〇年、一八六頁所収) 一〇頁。
- (31) 点線を以て示した部分は邦訳を省略した部分である。また、サヴァリーいうところに係る以下の検討に基づき、内容を補充した部分には括弧を付してある。
- (32) サヴァリーの与える記帳例示にあつては、抄録帳上に各丁数の記載が無い。しかしながら、以下に於いて観察することとなる、諸日記帳上に記された、転記先抄録帳丁数を示す符丁を手掛りとして考えるならば、彼の与える抄録帳の最初の紙葉、見開き二頁分が彼のいう「丁数一」に相当し、二番目の紙葉と三番目の紙葉の一部分が「丁数二」に、また三番目の紙葉の残りの部分が「丁数三」に相当すること分明となる。
- (33) 日付の八月三十一日は八月一日の誤り。また金額の左側に附記されるべき転記元を示す符丁は丁数八となるべきである。
- (34) かかる検討に基づき、売上受取日記帳の前掲邦訳に於いては、当該部分に括弧を付した。
- (35)(36) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二八二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二六頁。
- (37) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 二八三頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二七頁。
- (38) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 三七八頁。
- (39) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 三七九頁。
- (40)(41)(42) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二七七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二四頁。
- (43) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 二八三頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三二七頁(挿入—山添)。
- (44) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 二四八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九〇頁。
- (45) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 二六八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇五頁(挿入—山添)。
- (46) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 二五七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九六・二九七頁(挿入—山添)。
- (47) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 二五八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九七頁。
- (48) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 二五七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九七頁。
- (49)(50) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第二編 二五八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九七頁。

- (51) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五七・二五八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九六・二九七頁。
- (52) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九六頁。
- (53) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九七頁。
- (54) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五七頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九六頁。
- (55)(56) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九七頁。
- (57)(58) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九七頁。
- (59)(60) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇〇頁。
- (61) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六三―二六五頁（なお同書第八版、第一卷第一部 三〇一―三〇三頁に於いても同様の記帳例示の参照を得る）。

(62) 一オームは約〇・八メートルである。

- (63) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九七頁（挿入―山添）。
- (64) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五九頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九八頁。
- (65) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六〇―二六一頁（なお同書第八版、第一卷第一部 二九八―二九九頁に於いても同様の記帳例示の参照を得る）。

- (66) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五九頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九七・二九八頁。
- (68) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 三二二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三三九頁。
- (69) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 三二二・三二三頁（なお同書第八版、第一卷第一部 三三九頁に於いても同様の記帳例示の参照を得る）。

四 仏国初期商法上の会計帳簿記録の本質——問題の提起——

既述の如くサヴァリーは、商事王令上の会計帳簿として、小規模取引を為す商人に就いては二種類、中規模取引を為す商人に就いては三種類（四種類）、大規模取引を為す商人に就いては十一種類の会計帳簿を掲げているが、各規模

商人総てに共通して付けられる帳簿は、小規模・中規模商人の「仕入及び支払日記帳」、「掛売上及び金銭受取日記帳」であり、この各々を二つに分割した大規模商人の「仕入帳」・「金銭支払帳」と「日記帳」・「売上帳」であり、中規模、大規模各商人にあって基礎帳簿に相当する帳簿である。これら二種或いは四種の帳簿は、商人の取引規模の拡大するにつれて、それに伴い増大した取引の種類を基準として分割されている。つまり、元は一冊であった帳簿を、取引の種類毎に分割しているのである。従って、かかる帳簿の記録対象は、それが何冊に分割されていようとも全体としては何等相違するところはないと考えねばならない。サヴァリーが「王令（の規定内容）を満たすために」商人が備えるべき「唯一の帳簿」⁽²⁾として小規模商人の会計帳簿に言及したのは、かかる意味に於いて「唯一」であり、決して唯一冊の会計帳簿を意味していたのではなかったこととなる。即ち、この「唯一の帳簿」は、商事王令第三章第一一条条文中「一切の取引」を記録対象とする会計帳簿でありそれは前記の各規模商人の会計帳簿に相当するのである。

右に於ける「唯一の帳簿」に相当する各規模商人の複数の帳簿は、全体として、当該商人に生じた総ての取引に係る様々な事柄を記録対象としているが、我々のこれまでの検討に依れば、この様々な事柄のうちに、商事王令上の会計帳簿記録の本質に係る重要な記録対象を見出すことを得る。即ちそれは、かかる「唯一の帳簿」に相当する会計帳簿を基礎帳簿とし、そこから転記の為される主要帳簿の記録対象である。転記という手段を以て、特筆すべき重要な記録対象を明示していると考え得るからである。かかる主要帳簿は、中規模商人にあっては「抄録・理由帳」・「現金帳」であり、大規模商人にあっては「仕入帳の抄録帳」・「日記帳の抄録帳」・「商品銘柄帳」、そしてその記録対象は、発生・消滅した債権・債務の金額、増加・減少した現金の金額、受入・払出した商品の数量であった。とすれば、これらの記録対象が、商事王令上の会計帳簿の特筆に値する重要な記録対象、換言すれば、商事王令上の会計帳簿記録の本質に係る記録対象、即ち本質的な記録対象と看做し得ることとなる。

かくして、商事王令上の会計帳簿記録の本質を解明すべき手掛りは、当該会計帳簿の本質的な記録対象であるところの、発生・消滅した債権・債務の金額、増加・減少した現金の金額、受入・払出した商品の数量に求め得ることとなる。そこで、これらのうち受入・払出した商品の数量に着目して、「商品銘柄帳」に係るサヴァリーの解説を傾聴するならば「上記商品銘柄帳の様式を以て、商品が販売されたか否か、即ち商品が店舗或いは倉庫に未だ残っているか否かが容易に把握される。」⁽³⁾ということであり、これは即ち、商品銘柄帳の記録対象を以て、商品の残存数量が把握されるということである。また、発生・消滅した債務・債権の金額を記録対象とする「仕入帳の抄録帳」・「日記帳の抄録帳」に就いても、サヴァリーに依れば、それら両抄録帳に基づき、その要約として「債務控え帳」・「債権控え帳」が作成され、そしてそこには債務の残高・債権の残高が記録されていた。更に「現金帳」に於いても、増加した現金の金額と減少した現金の金額とを計算要素として現金の残高が計算されていた。とすれば、商事王令上の会計帳簿の本質的な記録対象は、商品の残存数量、債権・債務の残高、現金の残高と看做し得ることとなる。

以上に於いて我々は、商事王令上の会計帳簿の本質的な記録対象を現金・債権・債務の残高及び商品の残存数量と確定し得たが、かかる四者に共通する性質とは一体何であろうか。この問題の解答は、岩田教授の次なる指摘のうちに見出すことを得る。即ち「簿記における諸計算を仔細に吟味するとき、数量計算は必らずしも上記のごとき二次的な計算のみに限られていないことを知る。即ち補助簿ばかりでなく、主要簿の重要な勘定科目が数量計算を立派に行っているのである。たとえば現金収支に関する計算、即ち現金勘定（従って現金出納帳も）がそれである。一體貨幣が他の財貨の価値尺度たるばかりでなく、支払手段としての機能を有するの言うまでもないが、『それが支払に用いられる限り、それ自身商品である。その刻印は貨幣単位ペーニの数量を表わすのであって、その価値は他の事情により決定される』(Berliner, Buchhaltung-u. Bilanzlehre S.309) 元来通貨の数量と価値とは経済事情の正常なるかぎり、同一物と

してあらわれる。」更に「銀行預金、売掛金、買掛金、受取手形、支払手形等の金銭債権債務の諸勘定も亦数量計算であることを看過すべきではない。債権債務の金額は、その価値を示すものではなく、数量を表わすものである。」⁽⁵⁾

岩田教授に依れば、現金・債権・債務の帳簿残高は、いずれもそれらの数量を表していることとなる。とすれば、商事王令上の会計帳簿の本質的な記録対象である、現金・債権・債務の残高及び商品の残存数量は、実は、現金・債権・債務・商品の残存数量と考えねばならぬこととなる。かくしてここに、我国商法の淵源をなす仏国の初期商法たる商事王令上の会計帳簿記録の本質を、現金・商品・債権・債務の残存数量の記録と規定し得ることとなる。即ち商事王令会計帳簿規定に係る、「王令は、普通商人及び商人に対して、彼ら自らの総ての取引を記載した帳簿を備えるべく厳命している」⁽⁶⁾というサヴァリーの指摘に於いて、商事王令が商人に対して備付けを厳命している会計帳簿の記録が、ここに明らかとなった、現金・商品・債権・債務の残存数量の記録なのである。とすれば、かかる記録を商事王令が商人に対して厳命する理由は何であるのかが問題となる。換言すれば、商事王令に於いて、かかる会計帳簿記録の持つ意味は何であるのかが問題となる。現金・商品・債権・債務の残存数量を記録する商事王令即ち仏国初期商法上の会計帳簿の存在意義は一体何であるのか。今後に於いて解明を要する残された問題である。

注

- (1)(2) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二九八頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三三八頁(挿入・山添)。
- (3) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二六六頁、及び同書第八版、第一卷第一部 三〇四頁。
- (4)(5) 岩田巖 財産目録と数量計算(會計、第三六卷第四号 一九三五年、一五—三〇頁所収)二〇・二二頁。
- (6) Savary, J., Le Parfait Negociant 初版、第一編 二五二頁、及び同書第八版、第一卷第一部 二九三頁。